

TS百合

てと??

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

※『たいあつぷ』、『小説家になろう』にもマルチ投稿しています。

※PCの場合は「上部の閲覧設定↓挿絵表示 有り」をクリック、「スマホの場合は「上部のメニュー↓閲覧設定↓挿絵表示 有り」をタップ」してから本ページにバックすると、挿絵画像が自動に表示されるよう設定されます。

絵：『津路宮』様

h
t
t
p
s
:
/
t
w
i
t
t
e
r
.
c
o
m
/
t
u
s
z
i
|
3
8

目次

001 隠れて、生きよ。 — 1

002 君にとつては、藁の寝床のうえ

に寝ていても平然としていられる方が、

黄金づくりの寝台とぜいたくな食卓とを

もちながら、平静が乱されているよりも、

よりよいことだ。 — 16

003 われわれは、日常の私事や国事

の牢獄から、われわれ自身を解放すべき

である。 — 36

004 知者を尊敬することは、尊敬す

るその当人にとって、大きな善である。

58

005 われわれは、旅の途中にあるか

ぎりは、これまでの道よりも、これからの

道をより善いものとするように、努むべ

きである。 — 80

006 過ぎた日の善いものごとを忘れ

去れば、その人は、まさにその日に、老い

ぼれる。 — 107

007 知者は恋に陥ることなく、また、

恋は神与のものではない。(前編)

126

0 0 1 隠れて、生きよ。

幸福とは、心身に苦痛が存在しないことである——と、ある哲学者が言った。

どれだけ質素な生活であろうと、怪我も悩みもなければ幸せな状態なのであり、逆にどれだけ裕福な暮らしをしようとしていようと、病気や懊悩に苛まされていれば不幸というわけである。なるほど、確からしい言い分である。

金・名誉・権力・友人・恋人……さまざまな要素が人生にはあるが、どれも絶対的に価値付けることはできない。ひとによって、それがどれほどの量でどれほどの影響がもたらされるのか、千差万別すぎるのだ。単純な功利計算などできようはずもない。

「……………朝か」

はるか昔に、論文テーマとして研究した内容をふと思い返しながら、俺はぼんやりと呟いた。

窓から朝日が差し込み、俺の顔を白く照らしていた。いつもの起床時刻だ。そして、すぐに仕事が始まる時間でもある。

「さて……………」

くだらない思考を巡らせたおかげか、意識ははつきりと覚めていた。昔から寝覚めは悪くないタチではあったが、「ここ」で働くようになってからは生活の規則正しさに拍車がかかり、機械のように寝起きできるようになっていた。なかなか効率的な体だ、と自分でも思う。

ベッドから下りて、俺がまずやることは――

「起きてください、リタ」

向かいのベッドのもとへ歩み寄り、掛け布団に包まった相方の肩を揺らす。ううん、と呻きながら、彼女は顔をこちらに向けた。十代前半の少女の、あどけなさが残る寝顔。それはほほ笑ましい光景であるが――許されるのは休日の時だけである。

「起きなさい」

俺は少し強い語調で言いながら、無理やり彼女の布団を引き剥がした。

相部屋の少女――リタの姿がさらけ出される。栗色の癖つ毛と、そばかすの少しある小顔。身に付けているのは、薄い布地のシユミーズと、紐を結んで留めるタイプのパンティのみ。まだ寒くない時期なので、寝入る時は下着姿が基本である。

――もちろん、それは「俺」も同様で。

いま自分の服装は――目の前の「少女」と、ほとんど変わりはなかった。

「朝ですよ、リタ」

そう呼びかけて、彼女の肩を叩く。すると、やっと寝坊助の眼が開かれた。だがその半目の瞳は、まだぼんやりとしていて、覚醒しているとは言いがたい様子だ。

リタは寝ぼけながらも、ようやく俺に視線を向けて声を上げた。

「う……むにあ……おはよお……カレン」

「おはようございます。……寝癖がついていますよ」

「ん……」

側頭部のびよこと跳ねた髪に、気だるげな表情で触れるリタ。寝相が悪いからか、彼女の頭にはしよつちゆう寝癖がついていた。髪の質というのもあるのかもしれないが。

そういえば、俺は寝癖で悩んだ経験がないな——と、自分の髪に軽く触れる。

肩にかかる程度まで伸びた黒髪は、さらりとした肌触りだった。とくに手入れはしていないし、するつもりもないのだが、この艶のある髪は少し気に入っていた。黒という髪色が、前と同じで親しみを感じられるからかもしれない。

「遅刻して、ミセス・スターンに叱られても知りませんよ」

いまだベッドの上でぼうっとしているリタに忠告して、俺は彼女のベッドから離れた。他人を気にかけることより、自分の身支度を優先しなければならぬ。

洗面器に水を張って、顔を洗う。冷たい水は、かすかに残っていた眠気も完全に拭い

去つてくれた。それから部屋の隅にあるクローゼットに赴き、仕事服を取り出す。黒い布地のドレスに、白いエプロン。いわゆるメイド服である。

「……………」

俺は衣服を手を携えて、化粧台の上に掛けられた鏡に目を向けた。

——そこには、あまり感情が見えない十二歳の少女が映っていた。

ほとんどの時間を屋内で過ごすため、その肌は雪のように白い。それを美しいと捉えるか、不健康と捉えるかはひと次第だろう。俺は後者だと思うが。

顔立ちはかなり整っていて、美少女と呼んでも不足はない端正さだった。もつとも——それを活かすことは永劫なからうから、宝の持ち腐れというやつかもしれない。

「……………」

鏡に映つた像を睨みつけるように、俺は目を細めた。

——睨み返してきた少女の瞳は、ひどく冷淡で生気に欠けている印象だった。その年頃の女子にあるべき、健気さや爛漫さはどこにも見当たらない。世界というものは、人生というものは、それほど夢にあふれた素晴らしいものではないと、知つたふうな目つきをした生意気なクソガキだった。

その少女は——紛うことなく、俺の姿だった。

「……………」

覚醒し冴えわたった頭は、この自分の姿が確かなものであると証言する。幼いころから紡がれた記憶も、今の俺が女性であることを保証する。俺が年若い少女であることは、否定しようがない事実だった。

鏡の少女は、皮肉げに唇を歪めた。……笑顔がない、とよく指摘されるのだが、どうにも俺には愛想のよい笑いを浮かべるのが苦手らしい。こんな表情を見せるくらいだったら、無表情のほうがよっぽどマシだろう。

つまらない笑みを消し、手早くメイド服に着替える。この屋敷の仕事着はすべてお仕着せ、つまり統一された制服である。制服は俺にとって好ましいものだった。没個性なそれは、自分の異端すぎる「個」に対する意識を和らげてくれる。

「うにゆう……ふわあ……」

気の抜けるような声が聞こえてきて、俺は眉をひそめながらそちらに体を向けた。案の定、リタがあくびをしながら、ようやくベッドから這い出てきたところだった。

同室で寝起きするようになってもう一年近く経つが、この歳の近い同僚は相変わらずの様子だった。睡眠時間はそう変わらないだろうに、こうも寝覚めが違ってくるとは思議なものだ。本人の努力不足——と厳しい人間は言うかもしれないが、俺はあまりそう思わなかった。脳の構造、作用、それによって発揮される能力——それらは先天的資

質に左右されやすいのだから、ひとえに本人に非があると断ずることはできない。ある人には簡単にできて、ある人には途轍もなく困難なことがあるのだ。——俺はそれを、短くない人生で知っている。

……また、くだらない思考を繰り返してしまった。俺は内心で舌打ちしながら、リタに声をかける。

「水は出しておいだったので、顔を洗ってください」

「んー、ありがとお……」

蛇口を捻れば水が出てくるような水道は、屋敷三階に位置する使用人の寝室には存在しない。上水道自体は存在するが、電気エネルギーを利用する技術がないこの世界では、上層階に揚水するべがないのだ。したがって、一階で水瓶や水差しなどに水を汲んで、それを飲料や洗面などに利用する形となる。

便利な技術にあふれた世界で生きた人間ならば、なかなか苦痛に感じる生活環境と思えるかもしれないが——これが意外と、人というのは環境に慣れるものらしい。用水の不便さも、照明の少なさも、その他もろもろの不自由も、生活を続けていくうえで不思議とそこまで気にはならなかった。この世界の存在に、俺はすっかりと馴染んでしまっていた。——もちろん、*“不可思議な力”*があることも含めて。

「うへえ……髪が戻らない……」

リタは水で濡らした手で頭を撫でつけるが、どうやら寝癖を直すのに苦労しているらしい。俺は化粧台の引き出しから櫛を取り出すと、彼女のもとへ差し出した。

「はい、どうぞ」

「ああ、ありがと。……せっかくだし、あたしの髪、カレンが梳かしてくれない？」

「しません。私はあなたの侍女ではありません」

「ちえーケチ……なあんてね。知ってる知ってる、カレンは『お嬢様』の侍女だしね」

「——雇用契約上は、平のメイドですがね」

彼女の軽口に、淡々と返す。

もう二年近く、この屋敷に住み込みで働きつづけているが、今の俺の仕事はほかのメイドたちと少し違っていた。変化があったのは、ちょうど半年くらい前だろうか。その辺りから、徐々に、成り行きとも言えるように普通のメイドらしからぬ仕事を求められるようになってしまった。

——それに不満があるわけではない。

というより、むしろ気に入らないのは同僚のメイドたちのほうらしい。この屋敷で下から数えたほうが早い年下の俺が、立場上は同じ身分でも実質的に高位の業務をこなして、同僚よりもやや高い給金を貰っていることが、生意気でいけ好かないと感じるのだろう。要するに、妬みというやつである。

どうしてあんなやつが、という感情はわからなくもないどころか、かつての俺にとってはひどく共感できる感情であるせいで、極めて複雑な心境だった。この世には、運に恵まれているやつがいる。才能に恵まれているやつもいる。そして、その反対のやつも存在するのだ。持たざるものからすると、持っているやつらは本当に羨ましくて悔しいんだ。死にたくなくなるくらいに。

「——先に行つていますよ。部屋を出るときに、施錠も忘れないでくださいね」
「はあい。もう、お母さんみたいなんだから」

とつくに用意を済ませている俺に対して、リタはようやくやくメイド服に着替えている最中だった。遅刻をしないか心配だったが、あれこれ付き添ってやるのも過保護というものだ。俺は彼女の母親でもないし、侍女でもないのだから。

先んじて自室を発つた俺は、一階まで下りてトイレで用を足してから、同階の使用人ホールへと向かう。長いテーブルとそれに見合う数の椅子が並べられた部屋は、使用人たちがミーティングや食事、あるいは休憩をするための場所だった。

すでに数人の下級使用人が先に待機しており、入室してきた俺に視線が向く。が、とくに親しい間柄の人間はいなかったの、言葉を発する挨拶はなかった。頭をわずかに下げて、会釈する程度だ。

「……………」

空席に腰を下ろし、大きく息をつく。向かい席のメイド二人の雑談が耳に入ってくるが、あまり興味のない話題ばかりだった。暇な時間に耐えかねたように、俺は目をむつて思考に埋没する。

——世界というのは、どうにも奇妙で理解しがたいものだ。

使用人ホールで朝礼が始まるのを待っている自分の存在に、俺はどうしても怪訝な気持ちを抑えることができなかった。なぜ生きているのか、という問いが生まれてくるのは哲学的な考察だろうか、あるいは科学的な疑問だろうか。

間違いなく命を絶つたはずの俺が、どういうわけか地球と似たようでも異なる世界にいて、こうして今なお確かに生きている。

そのうえ体はまったく別物であり、外見上の共通点はほとんど見当たらない。しいて言えば、髪が同じ黒色なことぐらいか。

異なる世界の、前世の記憶。それを保持して生きている人間というのは、少なくとも俺以外にはいつさい心当たりがなかった。まだここに住み込みで働くより前に、図書館で同様の事例がないか必死に本を漁ったものの、けっきよくわからず仕舞いだった。

推察するにしても判断材料が乏しすぎて、正直なところ「考えるだけ無駄」というのが結論なのかもしれない。

あるいは、もつと宗教的に、素直に捉えるならば——

神のように超常的な存在が、俺に生きなかせとチャンスを与えたのだろうか。

「——ふう、ぎりぎり間に合った」

隣に着席しながら安堵の声を上げる少女の存在に気づき、俺はゆつくりと目を開いた。ざつと見回したところ、いつもの使用人はすべて揃っているように見えた。

「遅いですよ、リタ。もつと余裕を持って来るようにしないと」

「う、ううん、急いだはずなだけどなあ」

あはは……と苦笑する彼女に対して、もつとしつかり忠告すべきだろうかと逡巡する。遅刻を重ねると減給になりうるので、それを咎めることは彼女のための行為ではある。だが、俺は彼女の母親ではないのだ。口煩く言うことは、はたして一介の友人として妥当なのか。——判断が難しいところであった。

けつきよく俺は口をわずかに開きかけただけで、すぐに閉ざしてしまった。思い巡らすだけで実行できないのは、俺の前世からの悪癖だった。為せば成るとは限らないが、為さなければ成らないのは自明の道理である。それを理解しているというのに、俺は行動を起こさず無為な思考に逃げてしまいがちだった。

「——おはようございます」

鍵束の揺れる音とともに、冷厳な印象を含んだ挨拶がホールに響いた。上級使用人たる家政婦ハウスキーパー——つまり上司に当たる存在の登場に、メイドたちは緊張した面持ちになっ

た。

「おはようございます、ミセス・スターン」

皆々が立ち上がって、彼女に礼をする。屋敷のメイドにとっては、おそらく当主や女主人よりも恐れられているのが、この眼鏡をかけた四十路過ぎの家政婦だった。人事権を握っているのも理由の一つだが、何よりも彼女自身が厳格な性格であるため、メイドたちの間では彼女の前で粗相をしないことは絶対の掟だった。

鍵束の音を鳴らしながら、ミセス・スターンはテーブルをぐるりと回るように移動して、メイドたちから寝室の鍵を回収してゆく。仕事中は彼女の許可を貰わないかぎり、私室には戻れないのである。といつても、食事も休憩も基本的に使用人ホールで取ることになるので、サボりたい人間以外にはとくに不都合もない規律だろう。

「皆さん、揃っているようですね」

鍵の預かりとともに、部下全員の出勤を確認した彼女は、普段どおり冷たく落ち着き払った声で領いた。

こうして出欠をとって朝礼を始めるのが、この家での仕事の始まりだ。本日の仕事の予定、外から来客がある場合はその対応指示、あるいはその他もろもろ注意などが伝えられてから、各々の作業をこなしてゆくのだ。

ちなみに男性の使用人は二階の別室で執事をトップとして、台所の使用人は離れの厨

房棟でコック長をトップとして、同様の朝礼と勤怠管理をおこなっている。部署ごとにつきつちり別れて、上司が部下を管理する様は、まるで会社のような。人間の活動というもの、異世界でもそう変わらないということだろう。

「——以上です。それでは、皆さんよろしくお願ひします」

連絡事項はそれほど多くなかったため、朝礼はいつもより短い時間で終わった。使用人たちはそれぞれ立ち上がり、みずからの仕事へと向かいはじめた。

「……じゃ、がんばってね？ カレン」

「ええ、またあとで。リタ」

声をかけてきた彼女に、そう返す。リタは愛想よくほほ笑んでウインクすると——使用人ホールから去っていった。

皆が持ち場へと向かうなか、俺だけはミセス・スターンのもとへ近寄ってゆく。ほかのメイドとは違う仕事について、個別に連絡を受ける必要があるからだ。

「本日もよろしくお願ひします、ミセス・スターン」

「ええ、よろしく。……いつもの鍵よ」

「ありがとうございます」

彼女から仕事に使う合鍵を受け取り、ドレスのポケットにしまいこむ。

「今日も、予定は変わりません。スケジュールに合わせて対応してください」

「かしこまりました」

俺が淡々と頷くと、ミセス・スターンはわずかに眉を寄せて、訝しむような語調で尋ねてきた。

「……あなたはいつも不満を口にしませんか、もし意にそぐわないのであれば、わたくしから旦那様に打診しますよ。本来の仕事ではないのですから」

「いえ、とくに不満などございませぬ。……そのような表情に、私の顔は見えますか？」
「表情がわからないから尋ねているのですよ」

彼女は真顔で言った。感情表現が乏しい自覚はあるが、そこまではつきりと言うほどののだろうか。俺も機械ではないのだから、自然と目や口に情緒が浮かぶはずなのだが。

「年頃の多感な女子らしく、純真で健気な方だと私は思っています。お嬢様にお仕えていると、私自身いろいろと考えさせられて自分の為にもなりますよ」

「あなたも年頃の女子ですが」
「そうでしたね」

さすがに思春期の女子のような心理など俺にはないので、なんとも言えぬ心境で受け答える。

そして言ってから、ここは苦笑でもしながら肩をすくめたほうが良かったのだろうか、

と反省する。こういうところで親しみやすい雰囲気を出せないから、俺も同僚との仲を改善することができないのだろう。前世から相変わらず、人間としての能力の欠如を痛感せざるをえなかった。

「……ですが、気にかけてくださって、ありがとうございます。メイドたちはミセス・スターンを怖がっていますが、その厳しさはある種の優しさだと私は思っています。いつも本当に、ご苦勞様です」

「——お世辞を言っても、給料は上げないわよ」

俺の勞いに、彼女はどこか柔らかい色を含んだ笑みを浮かべた。女性的で上品で、そして人間らしい微笑だった。

こちらとしては本心で言ったのだが、世辞として捉えられたのだろうかと少し疑問が残った。彼女は怒りをぶつけることなく、冷静に他者を叱ることのできる能力を持った人間だ。上司として有能でふさわしいタイプであることは、日々の振る舞いを見ている俺にはよく理解できていた。

語ろうと思えばいくらでも理想の上司論について話せるのだが、まあ今はお互いそんなことをしている場合ではないので、俺は彼女に丁寧な一礼をした。

「お嬢様のところへ行かねばならないので、お先に失礼いたします」

「……ええ、がんばってらっしゃい」

「それでは」

俺は最後にほほ笑んでみせた——つもりだが、うまく笑えただろうか。自信はどこにもなかった。

002 君にとつては、藁の寢床のうえに寝ていても平然としていられる方が、黄金づくりの寢台とぜいたくな食卓とをもちながら、平静が乱されているよりも、よりよいことだ。

フレオリック家の三女、フィオナ。その彼女に対して、侍レディーズメイド女として働いていた女性が一身上の都合で退職したのは、半年ほど前のことだった。

奉公人といえども労働者に過ぎないため、この世界では貴族の家に仕える人間が私事によつて退職することは珍しくない。とくに女性使用人は、結婚などによつて暇いそぎを申し出るケースも多かった。

さて、そうなると職務を引き継ぐ新しい人材が必要になるわけだが――

これが意外と、使用人として適当な人物を採用するのは難しいのだ。掃除や洗濯をす
るだけのメイドなら、どこぞの馬の骨でも運がよければ就業できるかもしれない。だが

侍女ともなると、名のある人間が発行した紹介状を通すことが大半だった。

さらに、身元だけでなく能力も相応のものがなければならぬ。礼儀作法や常識などがきちんと備わっているか、主人の生活をサポートするすべを心得ているか。何よりも、そばに仕えるうえで二人の相性が合うかどうか。求められる条件は、単純な仕事よりはるかに多かつた。

そういうわけで、フィオナの侍女が辞めたからといって、後任が即座に見つかるわけもなく――

「……時間か」

――なぜか目をつけられたのが、俺だったというわけだ。

侍女の仕事をほかのメイドにやらせるといふのは、一時的であればそこまで特異なことではない。朝に主を起こしにいつて、紅茶を淹れたり、話し相手になつたり、簡単な外出に付き添つたり、まあそんなことは平のメイドでもできるだろう。

ただ下級使用人のメイドだと、田舎から出稼ぎにきた世間知らずな生娘のパターンが多いので、貴族のお嬢様の侍女をしつづけるのは少々荷が重いと云えた。とくに来客がいる前で侍女が粗相をしてしまったら、主の恥にもなつてしまう。だからこそ、その辺のメイドに侍女の仕事の長期にわたつてやらせることは、基本的にはあまりなかつた。

……基本的には、である。

「さて……お嬢様は、相変わらずおねむかな」

ぼんやり呟きながら俺は——その部屋の扉を、トントンとノックした。

返事は、ない。

もういちど、ノックをする。やはり反応はなかった。

「入りますよ、フィオナお嬢様」

間違はなく聞こえていない言葉を、俺は淡々と呟く。いちおう二回ノックして声をかけてから開錠する、というのが朝の起床を促しに行く時の決まりである。泣けるくらい律義に守っているのだが、今まで起こしにいく前に主が目覚めている例は、悲しいことに一度もなかった。

「失礼します」

ポケットから家政婦に渡された鍵を取り出し、それを使って扉を開く。

暖かみのあるクリーム色の壁紙と、落ち着いた木目のタイルで綺麗に彩られた広い空間には、高級そうな家具や寝具がゆとりをもって配置されており、いかにも金持ちの部屋といった風情だった。

フィオナが三女のわりに豪勢な部屋が割り当てられているのは、単純にほかのフレオリック家の息子や長女が、仕事の都合や嫁入りなどで屋敷を出ていってしまったか

らである。月に数度は、家の息子や娘たちがこの屋敷に顔を出したりもするのだが、毎日ここで寝起きしているのは当主と奥方、そして次女、ならびにフィオナの四人だけというわけである。

「……………」

ベッドのほうに目を向けると、布団からひよっこり金髪が顔を覗かせていた。こちら側の後頭部を向けて、横向きで寝入っているのだろう。

起きていないことは明らかだったので、俺は無言で動くことにした。戸口に待機させていたワゴンを引いて、部屋の中に入室する。毎朝、白湯を入れたポットと汲んだばかりの水差し、そしてコップやタオルなどを一緒に運ぶのも決まりだった。

テーブルのそばにワゴンを固定したところで、ようやく俺はフィオナのもとへと近づいていった。

「——朝ですよ、フィオナ様」

声をかけてみたが、返ってくるのはかすかに聞こえる寢息だけだった。俺は目をわずかに細めると、ベッドに身を少し乗り出して、布団の上から彼女の肩をやさしく揺らした。

「朝ですよ。お目覚めになってください」

「……………ううー……………ん……………」

うなるような、それでいて可愛らしい声を漏らしながら——フィオナはころりと顔をこちらに向けた。

——俺とほぼ同じ年頃の少女が、あどけない寝顔をさらしていた。

美しい肌と繊細な顔の線は、まるで人形のように整っている顔立ちだった。ただ人間離れしているという雰囲気はなく、どことなく愛嬌もうかがわせる容姿であるため、親しみを感じられる美少女と言えるかもしれない。

その長い髪も金糸のように輝く色だったが、残念なことに寝相のせいで少し乱れている。あとで、きちんと梳すいてやるべきだろう。

——フィオナ・フレオリック。眠りこけている彼女が、そこにいた。

「朝です、フィオナ様」

三度目の正直、とばかりに、もう少し強く肩を揺らしながら言う。相手がお嬢様でなかったら、リタの時のように布団を引つ剥がしていたのだが、穩便に起こすしかないのが煩わしいところである。

「……………うう」

うめき声のようなものを漏らしながら、その目がわずかに開いた。まぶたの間から、青く透き通った瞳が、俺に視線を向けていた。

「おはようございます」

「……………」

「おはようございます」

「……………」

無言。完全に寝ぼけている様子だった。

リタに勝るとも劣らないほど寝覚めの悪い彼女に、俺は内心で嘆息しながらじつと待つ。しばらくすると、フィオナは布団からするりと両手を伸ばし、俺の肩を捕まえて――

がっつき寄せられた。

ベッド側に上半身を乗り出していたせいで、俺は抵抗することもできず、彼女の胸元にかぶさる形となってしまう。お互いの胸がクッションになったおかげで、体を打ち付ける痛みがなかったのは幸いと言うべきだろうか。

「寝ぼけていらつしやいますね?」

肩を掴まれているせいで動くこともできず、俺は仕方なくその状態のまま彼女の耳元にささやいた。自分の黒髪と、彼女の金髪が、白い枕の上で重なり合っているのが目に映る。対照的な色合いだった。

フィオナは薄いネグリジエで寝入っていたため、その体のラインが感触としてよく伝

わつてきた。体軀はやや痩せていて、華奢と表現しても差し支えない体つきだ。俺もあまり他人のことは言えないが、その歳ならばもう少しふくよかであるほうが健康的だと思ふのだが。

「……おはよう、カレン」

「はい、おはようございます」

互いに耳元で、朝の挨拶を交わす。フィオナの声色は、ずいぶん眠そうでぼんやりとしていた。

彼女に抱きつかれるような形のまま、されど振りほどくわけにもいかず、俺は淡々と彼女に尋ねた。

「お目覚めでいらつしやいますか？」

「……んー。……このまま、もうちよつと……ねていい？」

「私は抱き枕ではないのですが」

「ちえー、ケチ……」

またリタみたいなことを言う。もつとも、ただの冗談で本当のわがまま娘ではないので、その点では共通する可愛げがあったが。

ようやく俺の肩が彼女の手から解放されると、その体を引き離す。フィオナは眠そうに、どこかつまらなそうに、目をこすりながら上体を起こした。

「洗面器に水を張ってきますね」

「んんー……うん、おねがい」

大きく伸びをしながらそう答える彼女は、それなりに目が覚めてきているようだ。二度寝してしまう心配もないだろう。

水と湯を混ぜ合わせて、洗面器にぬるま湯を用意しておえた俺は、タオルを手に携えて待機した。少しすると、ベッドから抜け出してきたフィオナがとぼとぼと気怠そうにやってきて、顔を洗いはじめる。

その様子を黙って後ろで眺めていると、しばらくしてフィオナは顔を上げた。目垢を洗い落とした表情は、さっぱりと眠気が取れている様子だった。

「はい、どうぞ」

「ん」

俺が差し出したタオルを受け取り、フィオナは顔を拭きはじめる。その間に白湯をコップに注いでテーブルに置いておく。起床時は湯冷ましで喉を潤すのが彼女の日課だった。

水滴をぬぐい去ったフィオナは、椅子に腰かけてコップに口をつける。一息ついたあと、彼女はどこかじつとりとした視線を俺に向けた。

「……カレン」

「どうなさいましたか」

「……む、むね」

「むね？」

フィオナは自分の胸板に手を当てるジエスチャーをした。薄いネグリジェ越しに小さな膨らみがうかがえるが、まだ大人の色気は帯びていなかった。

俺は首をわずかに下げ、目線を下に向けた。そこにはドレスとエプロン越しでも、胸の隆起が確認できた。年齢を考慮すると、発育が良いほうだと言えるだろうか。

「わ、わたしのほうが年上なのに……！」

「成長の時期と度合いには、個人差があるものだと思いますが」

俺は冷静に指摘した。第二次性徴の発現するタイミング、およびその進行具合など、ひとそれぞれだろう。そもそも年上と言っても、俺の体が十二歳で、彼女が十三歳。生まれた時期も半年くらいしか変わらないのでほぼ誤差である。

「これから女性らしく成長してゆきますよ」

「ほ、ほんとに……？」

「ええ、かならず」

半信半疑の色を目に浮かべるフィオナに、俺はそうはつきりと返した。女性らしく成長することは確実であろうし、嘘ではなかった。……その程度と限度については、まあ

保証できないが。

俺の言葉に少しは安心したのだろうか、フィオナは「そっかあ……」と呟いた。どこか遠い先を望むような面持ちだった。

「——お着替えはどうなさいますか」

話題を変えるために、俺はそう切り出した。まだ彼女は寝間着のままなので、服を用意しなければならぬ。

「今日はだれかお客さん来るの？」

「いえ、とくに来客のご予定はありませんが」

「なら、面倒くさくないやつで。どうせ外に出かけるつもりもないし」

「かしこまりました」

この地では服装など含めて実用志向にあるところが、かつて機能的な物にあふれた世界で生きていた俺にとってはありがたいと言えるだろうか。コルセットのような七面倒の極みのような存在がないことは、たいへん喜ばしいことである。

それでもゴムがないので、紐やピンなどで衣服を留めるのが主流であり、そこは少しだけ不便かもしれない。とくにトイレで用を足す時などは、嫌でも思い知らされてしまう。毎回めんどくさいのだ、パンツの紐を結びなおすのが。

妙なところで男の肉体を恋しく思いながら、俺はクローゼットへ赴いた。使用人の部

屋にあるものより、ずっと大きいその扉を開くと、これまたハンガーに掛けられている服の数も多かった。隣の箆笥棚に収納されている下着類も、同様に種類が豊富である。電動による紡績も縫製もない世界において、衣類の数はまさしく裕福さの象徴であった。

「……………」

どうしたものか。

服装選びを任されたものの、俺にはファッションセンスなどというものが皆無だった。巷の流行など、興味がなさすぎていつさき把握していないのだ。

それでも外出予定がないのなら、まあ難しく考える必要もないか——と適当に、衣類を見繕う。

「…………ツープースでも、よろしいですか?」

「うん、いいよ」

「それでは——」

下着はキャミソールとドロワーズ、およびペティコート。上着は簡素な白いブラウスと、裾の広い薄紅色のスカート。あとは膝上までの長さの黒い靴下。ひねりが皆無の取り合わせだが、屋内で過ごすならこんなもので構わないだろう。

衣服をカゴに乗せて、俺はフィオナのもとへ戻った。これでようやく、彼女の着替え

が始まるわけだが――

「……………」

立ち上がったてネグリジエを脱ぎかけたフィオナは、ふと目線を俺のほうへちらりと向けた。その瞳には、何か気まずさや躊躇のような色が垣間見える。

彼女はぷいと俺のほうに背を向けると、ネグリジエを脱ぎ去つた。まだ下にパンティが残っているものの、ほとんど裸に近い素肌がさらされる。肉付きの少ない体軀や、か細い肢体は、やはり華奢さが感じられた。

「…………そんなになさっているのですか？」

「う、うるさいわねっ」

あえて胸を隠しているフィオナは、その状態のまま右手を後ろに差し出した。そこにキヤミソールを渡すと、やはり背を向けたまま肌着を身に着ける。よほど乳房を見せたくないらしい。

同性同士、しかも侍女扱いの使用人が相手なのだから、そう恥ずかしがることもないだろうに――とは思うが、やはりひとによつては身体的差異に劣等感を抱いてしまうものなのだろう。

上下の下着を付け替えたところで、ようやくフィオナはこちらに向き直つた。そこからは、俺も積極的に着替えを手伝つてゆく。ブラウスはボタン留めだが、スカート類は

すべて紐を結んで留めなければならぬし、靴下も紐のガーターで固定しなければならぬ。ゴムがない世界の衣服は手間だらけである。

「——よろしいですか」

すべての着衣が終わり、フィオナに鏡の前で立つて確認してもらおう。彼女はいちど髪を掻き上げると、「うん」と素直に頷いた。これで、ようやく着替えは完了である。

次は——髪梳きか。

フィオナを化粧台の椅子に座らせ、櫛で髪を梳かしてゆく。

「……………」

「……………」

はたして貴族令嬢と侍女は、ふだんどのような会話をするものだろうか。

俺が漫然とした雑談を好まないタチのせいで、フィオナ側が話を振らないでいると、無言の空間になってしまうことが多々あった。俺自身は会話がなくても気にならないのだが、彼女にとつては退屈でつまらなくはないだろうか。少し気がかりではあった。

ふと化粧台に置かれた鏡を覗くと、フィオナの顔には陰りのような色が浮かんでいた。最近朝食の時間に近づくと、彼女に元気があまりなくなっていた。その理由をなんとなく察しながら、俺は静かに尋ねた。

「……………お気分が優れませんか？」

「べつに」

「私でよろしければ、どうぞ愚痴をこぼしていただいても構いませんよ」

「……………」

フィオナは迷うように目を細めたあと、疲れたように深い息をついた。それから陰鬱
そうな声色で口を開く。

「またお母さまから、小言を聞くハメになるんだろうな……………」

食事はフレオリック家の家族が揃っておこなう。その席で、家族から何か言われるの
が嫌でたまらないのだろう。

母親からの苦言。それを呈されるフィオナは、べつに日頃の行いが悪いわけでもない
し、性格に大きな難があるわけでもない。能力に關しても、語学や歴史学、法律学など
の分野の勉強において、文句なしに優秀であるのだが――

「――まだ『魔法』もろくに使えないのか、って絶対しつこく言われる」
不満そうに口をとがらせながら、彼女は抗議するように言った。

――魔法。

それこそが、この世界が明確に俺の生きていた世界と異なる要素であった。原理の理
解できない『不可思議な力』。何がどう作用して引き起こされるのか、科学的には解明
されていない現象。だが、それはまやかしではなく確かに存在していた。

指の先から炎が出る——そんな光景を目の当たりにしたら、ひとは手品だと思っただろうか。この世界の住人に限っては、そうは思わないだろう。何も無い空間に火も風も起こせるし、水や金属を作り出すこともできる。疾病や傷痕を治療、緩和することさえ可能だ。それが、この世界なのだ。

ただし、それは万人が行使できる能力ではなかった。魔法という現象を引き起こすのが得意な者もいれば、どう努力しても発現不可能な者もいた。そして、その性質はおおむね遺伝によって左右される傾向にあった。魔法の得意な血筋の人間は栄え、社会の中で高い地位につき、その家系は支配者層となった。

言うまでもないだろう——魔法に秀でた者が、貴族だというのは。

しかるに、魔法を使えない人間が貴族と称したらひとは何を思うだろうか。貴人は魔法という御業を権威として、広大な土地を治める上流階級に居座っていられるのだ。魔法の使える人間からも、使えない人間からも、魔法の苦手な貴族は「失格者」として捉えられるのは避けられないだろう。

「……………」

なんと声をかけるべきだろうか。

フィオナの髪を梳きながら、俺は少し思索していた。魔法が苦手であることに対する解決策を提示することは、少なくとも魔法研究者でもない俺にとっては無理な話だ。早

く魔法を使えるようになりなさい、と娘を叱る母親を理不尽であると非難し、彼女の溜
飲を下げる配慮をすべきだろうか。だが、それも母娘の仲を悪化させてしまうだけで、
あまり好ましくない手法のように思えた。

悩んだすえに、俺が出した結論は――

「――お嬢様の髪は、とても綺麗ですね」

「……はっ？ えっ？！」

唐突な褒め言葉に、フィオナは素つ頓狂な声を上げた。話の流れに対して、脈絡がな
さすぎたので、その反応も当然かもしれない。

しかしながら、それでも構うことなく、俺は彼女に素直な言葉を告げた。

「艶やかで美しい金髪だと思います。私は好きですよ、フィオナ様の髪」

「そ、こそ、そう？ あ、ありがとう？」

彼女は困惑しきった様子で、顔を赤らめながら返事をした。どこことなく嬉しさが顔に
滲んでいるところを見ると、悪い気分ではないのだろう。

――人間は、否定されて生きてゆくことはできない。

それは異世界においても、共通することだった。他人から、あるいは自分自身で、己
への肯定や承認がなされていなければ、ひとは生きるといふ行為を苦痛なくこなすこと

はできない。俺はそれを知っている。

だから、彼女を肯定するのだ。それだけで、苦痛にあふれた人生は多少マシなものになるだろう。

「僭越ながらこうして侍女のように、おそばで仕事をさせていただいておりますが——お嬢様と一緒にいると、本当にとても楽しく思います。いつもありがとうございます」

「お、お世辞を言っても何もあげないからね……？」

「本心からの言葉を口にしただけですよ」

「——」

フィオナは朱顔のまま、言葉が見つからないように口を半開きにしていた。ストレートな好意や褒辞に慣れていないのだろう。恥ずかしさと嬉しさを混ぜ合わせたような彼女の表情は、純情な子供らしい可愛らしさがあった。

しばらく、ふたたび無言でフィオナの髪を梳いていると、ふいに彼女は目を伏せながら口ごもるような声を上げた。

「あ、その……えつと……」

言いくさそうにしている様は、まるで意中の人への告白に臨む乙女を連想させた。もつとも、ここにいるのは同性同士であるが。

「なんなりと、おっしゃってください」

「……わ……………」

フィオナはいちど唾を飲み込むと、意を決したように改めて口を開いた。

「わ、わたしも……か、カレンの髪が好き。ほ、ほら……珍しいでしょ？　そういう、黒髪」

「……ありがとうございます。そうですね、私のような髪色の方はあまり見かけないかもしれません」

漆黒のような髪色は、大陸の遠方からやってきた人種に由来するものらしい。この辺だと、百人に一人か二人いるかどうか、といったところか。

俺自身も自分の髪は好ましく感じているので、この形質を授けてくれた母には感謝をすべきだろう。……いつか再会した時にでも、かならず言葉を伝えたいものだ。

「あつ、お世辞じゃないからね？　だって、侍女の代わりとしてカレンを指名したのも……その髪が目に残まったからだし」

「——さようでしたか。目立つ色でしょうし、納得です」

なるほど。おそらく彼女にとっては、メイドの中で俺がいちばん印象に残っていたの
だろう。おまけに年齢が近いうえに、自分で言うのもなんだが勤務態度も良いほうだっ
たので、フィオナや当主や家政婦の全会一致で俺が侍女代理に選ばれたのも道理という
わけだ。

「……お嬢様からそう褒めていただけると、たいへん光栄です」
「わ、わたしこそ……ありがとう……えへ……」

感謝を口にするフィオナの表情は、嬉しさを隠しきれないように口元がにやついていた。少なくとも、家族からの小言を憂う気持ちはまぎれたのだろう。俺の採った選択は、相応の成果があつたと言えよう。

——為せば成る。その言葉が、俺の頭をよぎった。

この場でフィオナに何か声をかけることを諦め、無言を貫いていたら、おそらく彼女は陰鬱な気分のまま朝食に向かうことになったのだろう。だが、俺の行動は彼女に良い変化をもたらすことができた。それはきつと、とても喜ばしいことなのだろう。

あるいは、もつと昔から最良の選択を迷わずおこなえていたのなら——

「……そろそろ、朝食のお時間ですね。何か不足はございませんか」

「服も髪もぼつちり大丈夫。……はあ、やだなー。お母さまから、今日はなんて言われるか」

「もしかしたら、褒められたりするかもしれませんがよ」

「ええー、ないない。カレンじやあるまいし」

ふと、俺は思ってしまった。

もし俺が一つも間違うことなく生きていたら、この少女とこうして言葉を交わすこと

35 002 君にとっては、藁の寝床のうゑに寝ていても平然としていられる方が、黄
りの寝台とぜいたくな食卓とをもちながら、平静が乱されているよりも、よりよいこと

も、ありえなかつたのではないか——と。

物事の真理も正しさも、賢者ではない無知蒙昧な俺にとっては、結局わかることなど
ないのかもしれない。

003 われわれは、日常の私事や国事の牢獄から、われわれ自身を解放すべきである。

休日というのは、人間にとって必要不可欠なものである。

むろん、それはこの世界においても変わりはない。屋敷で働く使用人にも、週に最低一日は仕事から解放される日を設けられている。フィオナの侍女役を務めている俺も、彼女の予定に合わせてつつ最低限の休みは取っていた。

いつもと変わらず朝早くから起き、メイド服の代わりに私服のワンピースドレスに着替えた俺は、フィオナの朝食までの侍女業務だけこなして仕事終わりとした。あとは一日、自由な余暇である。

「……失礼します」

駅馬車が目的の駅に着いたところで、俺はほかの同乗者にそう告げながら、逃げるようにさっさと降りた。

窮屈さを感じる空間からようやく解放され、安堵の息をつきながら出口へと向かう。駅は次の出発を待つ客や、馬の世話をする駅員などで、それなりに混雑している様子

だった。

この辺では馬車による交通網がかなり整備されていて、運賃さえ払えば気楽に移動することができた。駅馬車は鉄道、乗合馬車はバス、辻馬車はタクシーといったところだろうか。

いつも俺が休日に向かうのは、フレオリック家の屋敷から最寄りの街から一つ隣の街だった。なぜ、わざわざ馬車に乗ってまで遠い街に出かけるかというと——単純に、こちらのほうが栄えているからである。

「……………」

駅をあとにして、市街から上を仰ぐと——高い陸橋が街の中にそびえていた。見慣れたそれは、山から水を運んでいる水道橋だった。かつて俺のいた世界ではローマ帝国が水道整備に積極的であったが、もし水道技術が廃れることなく継承されていたら、このような街が西洋に数多く残されていたのであろうか。

そんなくだらないことを思いながら、俺は歩きだした。向かう先はすでに決まっていたので、足取りに迷いはなかった。

——多様な店と人間が、ひっきりなしに視界に映る。

見るからに繁華なここは、フレオリック家の所領の東側に接する、アジュール家が支配している土地だった。フレオリック家もそれなりの領地を持つ地主貴族ではあるが、ア

ジール家と比べると格が下がることは否定できなかった。おそらく、地代収入だけでも二倍近い差はあるはずだ。

「傷の手当を——」

ふいに路肩で、腕を抑えた男性が声を上げて目に入った。彼が話しかけている先には、古めかしいローブをまとい、指揮棒のような杖を手にした青年がいた。——魔法使いの格好である。おそらく辻医者なのだろう。

べつに衣装は魔法行使に関係ないし、杖も意識を先端に集中させやすくする程度の効果しかないのだが、周りから魔法使いと認識されやすくするために、こういう姿をしている場合が多かった。医者が白衣を着ているようなものだろうか。

「——これで問題ない」

「ああ、ありがとうございます……」

傷痕を治癒された男性は、感謝の言葉を述べながら魔法使いの青年に数枚の小銀貨を渡す。報酬としては、あまり見合っていない金額だった。

——貴族はつねに人々へ温情を与えよ。

そのような言葉をしばしば耳にするし、実際に慈善の理念が広く行きわたっているのが、この国の特徴でもあった。要するに、ノブレス・オブリージュというやつである。

魔法によって敵を打ち倒す——などという行為は、長らく大した戦争も起きていない

この世界においては、もはや貴族には求められることではなかった。瞬時に火を起こせるのは、まあ便利ではあるのだが、火起こし自体は誰にだってできる。魔法使いにしかできない芸当——すなわち、医療行為や金属の現出が、現在の社会においても求められる魔法であった。

そんなわけだから、家督を継げない小貴族の三男坊や、あるいは平民でも運よく魔法の才を持った人間が、街で医者をしたり貴金属売りをしたりといった光景はけっこう目にする人が多い。とくに辻医者は市井の人々から重宝され尊敬される存在であり、社会の安定化に大きく貢献していると言えるだろう。

「……………」

圧政などもない、平和な世の中であった。

もちろん不幸もあるだろうし、犯罪も起きてはいるが、それでも閉塞感のない世界だった。もしかしたら——かつての俺の世界よりも、生きやすいと言えるのかもしれない。

はたして物質的な豊かさはどの程度、人々の幸福に影響するのであろうか。そんなつまらない哲学的思考を巡らせながら——俺はようやく目的の店にたどり着くことができた。

「……………いっしょに」

ドアを開けて店内に入ると、カウンターの席に座った初老の男性が、あまり威勢のよくない声をかけてきた。俺は無言で、わずかに頭を下げて挨拶をする。月に数回は立ち寄っているの、店主には顔を覚えられてしまっていた。

——店には本棚が並び、書籍が各棚に陳列されていた。

つまるところ、本屋である。こうして店として成立する程度には、本を買って読むという行為は人々に一般化していた。

映画やらテレビやらが存在しないこの世界においては、読書は気軽に楽しめる娯楽の代表だろう。農村部の出身でも最低限の識字はできるように教育されるため、屋敷で働くメイドにも小説を読んだりして余暇を過ごす者は多かった。

「ヴァージニア……ウルフ……」

メモ書きした紙片を手にしながら、俺は本を睨むような目つきで眺めてゆく。

必ずしも書籍に背表紙があるわけではないので、棚には背を向けたものと表紙を向けたものが混在していた。おまけに装丁というものが画一的ではないため、著者名が上にあつたり下にあつたり、文字が縦書きだったり横書きだったり、じつにわかりづらいのだ。毎回、探すのに苦労してしまう。

なんとかか目的の本を見つけ出して、きつとあらずじに目を通す。屋敷で働くメイドが、貴族の子息に見初められてラブロマンスを繰り広げる内容の小説だった。

……はつきり言つて、俺の趣味からはまったく外れていた。だが、なぜこんなものを手に取つたかというところ——リタからついでに買つてきてくれと頼まれていたからだ。どうやら、彼女は恋愛小説が好きらしい。推理小説ばかり読んでいる俺とは対極であつた。

「——会計をお願いします」

頼まれ物を含めて、三冊の小説を購入する。その合計は、けつこう馬鹿にならない金額だつた。活版印刷のある世界とはいへ、それでも本は相応の高級品である。

安価に本を借りて読める貸本屋も存在するが、俺はこうして買うほうが多かつた。返す手間が面倒ということもあるし、何より——金には、そこそこ余裕があるからだ。

ほかの大多数のメイドと違って、俺は実家に仕送りする必要もなかつた。給料がまるまる自分の懐に入つてくるうえに、家賃も食費もかからないような仕事のため、経済的にかなり余裕があるのだ。楽な生活をしているな、と俺は自分に皮肉を抱かざるをえなかつた。

「……まいど」

億劫そうに言う店主からは、活気というものが感じられず、ただただ退屈そうだつた。もつとも——相手からしたら、俺のほうこそ生気に欠けた少女に見えるのかもしれなかつたが。

——俺はなんのために、この世界で生きているのだろうか。
ふと湧いた疑問には、答えなど見つかりそうもなかった。



喫茶店で軽食を済ませた俺は、行きつけの酒場のカウンター席で時間を過ごしていた。

買ったばかりの本を半分ほど読み進めたところで、ため息をついて栞を挟む。読書していたのは、リタが所望した恋愛小説だった。甘ったるい描写とセリフの羅列が、俺のさびれた心を余計に荒廃させたような気がする。趣味の合わない小説は、やはり読むべきではないのかもしれない。

「ん……」

俺は少し伸びをしてから、こがねいろ黄色色の液体が入ったグラスに口をつけた。

甘い香りが鼻孔をくすぐり、同時に独特の刺激が口内に広がる。かつての世界でもよく嗜んでいたそれは——アルコール飲料だった。

蜂蜜を発酵させて造った酒を、お湯で割ったものだ。若年者の飲酒を禁じる法律は存在しないので、こうして店でも堂々と酒を飲むことができた。もつとも、酒害について

は理解しているのです、さすがに強い酒は飲まないようにしているが。

「……………」

もう一度、蜂蜜酒で喉を潤してから——俺はぼんやりと店内に目を向けた。

テーブル席では、男たちが小皿のチーズをつまみながら談笑している。まだ昼過ぎだというのに酔いが回っているのか、彼らの笑い声は馬鹿みたいに陽気だった。これが喫茶店なら迷惑客でしかないが、ここは酒場で酔いを楽しむ場所なのだから、男たちが騒ぐのも問題はあるまい。

ほかにもいくつかのグループ客が、テーブルでそれぞれ言葉を交わしている。仕事の相談だったり、日頃の愚痴だったり、下賤な話だったり、取り留めがなく様々だった。それでも、どの人々にも共通しているのは——

「孤独は、知恵の最善の乳母である……………」

哲学者の格言をぼつりと呟くと、俺は蜂蜜酒を胃に流し込んだ。

カウンター席に視線を向けても、そこに座っている客は見られない。まだ混雑する時間ではないので、テーブルで気の合う仲間と向かい合って飲む連中が大半だろう。

カウンターの隅で黙々と読書をしている変わり者など、俺くらいなものだった。

「……………」

本を開く気力も湧かず、俺はぼんやりと宙を眺めた。何か思索するわけでもなく、感

概に耽るわけでもなく、ときおり酒を口にしながら、無為に時間を浪費する。

やがて寂寞に耐えかねたように、俺はバッグから木箱を取り出した。蓋を外すと、仕切りの片側に収納されている細長いそれを一つ手に取る。——紙巻き煙草だった。

通りの行商人が売っているものを気まぐれに買って以来、俺はこうして煙草も嗜むようになっていた。法律規制もないので、酒と同じく合法だった。さすがに屋敷では世間体があるので、休日の酒場でしか吸っていないが。

「——どうぞ？」

俺が呼びかけるまでもなく、バーテンダーが燭台を差し出してきた。ライターもマッチも流通していないので、魔法使い以外の人間が煙草に火を点けるときは、照明用のろうそくなどを火種にするのが一般的だった。

サーブスが早いのは、俺が携帯灰皿を取り出した時点で喫煙するとわかっていたからだろう。いつも昼過ぎに同じ席に居座っているの、俺の動向は完全に把握されていた。なんとも優秀な仕事人である。

「……どうも、ありがとうございます」

礼を言いながら、煙草の先端を火にかざす。乾燥した葉が燃烧され、煙が立ち昇りはじめた。

自作して付け足したフィルター部分を口に啞えて、小さく息を吸う。煙と、そして目

には映らない精神作用物質が入り込んでくる。口内で煙を弄んだあと、俺はそれを吐き出した。

肺の奥深くまで吸い込まないのは、癌という病のイメージが頭をよぎるからだろうか。この世界でも病理は共通しているはずだが、病気について研究した書籍がろくにないので、いまいち脅威の度合いを計りかねていた。

魔法による治癒がかなわず、病死した人間の例は存在する。だが、いかんせん術者の能力と患者の病状を精確に記録した資料が少なかった。どの程度の力を持った魔法使いなら、どの程度の病まで対応可能なのか。推し量ることは困難で、見当がつきそうもない。

——まあ結局は、できるだけ健康でいられるようにするのが一番なのだろう。

その結論を得ているというのに、こうして酒と煙草に酔いしれている自分は、ひどく滑稽だった。

「……………」

無言で煙草をふかし、ニコチンとは違った化学物質による刺激を享受する。神経が研ぎ澄まされ、意識は冴えわたっていた。ほかの客の談笑は、もはや俺の脳には届いていない。世界は驚くほど平静で、凍りついたように深閑としていて、そして薄暗い寂寥に

満ちていた。

虚空を睨みながら孤独に耽っていると——ふいに、すぐそばで音が生まれた。

「……失礼、少しお尋ねしてもよいですか。レディ」

——男が一人、俺のそばに来て話しかけたのだ。

それに気づいた俺は、口の中の煙をすべて吐き出し、吸い殻を灰皿に押し付けた。不意の声掛けには、怪訝な感情しか抱けなかった。

……ナンパだろうか？

そんなことを思ったのは、ここが酒場だったからだ。実際に一度、十代半ばの少年から誘いの言葉をかけられたことがあった。もちろん丁重にお断りしたが。

ちらりと声の方向に目を向けて——その手の話ではないな、と俺は察した。

三十代の、身なりのよい男性だった。シャツもベストも安物ではないし、髭が剃られ髪もきっちり整えられている。酒場にいることが不自然なほどの紳士だった。

「……なんの御用でしょうか」

俺は静かに聞き返した。横目のまま男性の顔をうかがうと、その口元には穏やかな笑みが見えかかっていた。

「とある方を探して……。お心当たりがないか、声をかけさせていただけたいのです」

「……その探し人とは？」

「ええ、ちょうどあなたくらい年齢で、あなたのように髪の毛の黒い——カレンという名の女性です」

「——」

予想をしていなかった事態に、俺は思わず目をつむって深い息をついた。

唐突な展開だったけど……意外なことに、そこまでの混乱は抱いていない。煙草のおかげで、精神が落ち着いていたからだろうか。

——この男は、俺が「カレン」だと知って話しかけている。

年齢と髪色で、俺を特定することは容易い。それでも、なぜこんな回りくどい尋ね方をしてきたかというところ——俺の恣意に委ねるといふ意思表示なのだろう。

カレンなどという少女に心当たりはない。そう答えれば、おそらく男性はすんなりと頷いて去るだろう。すべては俺の選択次第だった。

やがて俺は目を開けると、蜂蜜酒を少し飲んで口を湿らした。

「——私がカレンです」

そう答えたのは、なぜだろうか。

人を拒む道を自分で選んだ俺が、いまさら変化に手をかけようとしている。貴族の屋敷で働く、一介のメイドであることを望んだのは自分自身だったはずだ。光の当たらな

い場所で、退屈でつまらない人生を送り、そしてそれに満足して死ぬべきだと俺は思っていたはずだ。それなのに、どうして人を断ち切ろうとしないのか。いや、断ち切ることができないのか。

「……カレン様、ですね。ある御方が、あなたとお会いしたいとおっしゃっています。よろしければ、あなたのご都合がよろしい時に——」

俺と顔を見合わせた人物が誰かなど、尋ねるまでもなかった。相手もそれを理解しているのだろう。話を進めるのは驚くほどスムーズだった。

この先の休みの日程を伝えると、男性はそれをメモしてゆく。それから、必ず午後はこの酒場に来るといふことも伝えておいた。「あの人は忙しいので日時は定かではないが、いずれ時間が合った時に、この酒場で落ち合うことができるだろう。

必要なやり取りを手早く済ませると、最後に男性は恭しく一礼して去っていった。それはまるで、主人に対する召使いのようだった。

「……………」

ふと手にしていた新しい煙草を、俺はもとに戻した。何かに頼り、依存するのは、あまりよいことではないだろうから。一本だけで満足し、俺は携帯灰皿を閉じてバッグにしまった。

——はたして、俺の選択は何が正しくて、何が間違っているのだろうか。

フレオリック家で働くメイドとなって、流されるままにフィオナの侍女をして、そして別れを選んだはずの人物と再会しようとしている。自分の意志に基づいた一貫性というものが、どうにも欠けているようにしか見えなかった。

俺は——もしかしたら、何も選んでいないのではないか。正しい選択を、正しく選び取れたことなど、本当は一度もないのではないか。そんな平静をかき乱すような感情が、暗い水底から這い上がるように湧き出でてくる。

大した自信も信念もなく生きている自分に、失意や無力感のようなものを覚えながら、俺はグラスに残った蜂蜜酒をあおった。まるで、物憂さを胃に押し流すかのように。

「……………」

どうしてだか、あの時のフィオナの顔が思い浮かんでしまった。

俺の肯定的な言葉に、顔を赤らめながらも嬉しそうな表情を浮かべる、彼女の愛らしく純真な顔が。

あれはきつと、間違いではなかった。正しい選択だった。弱気な俺でもそう確かに思えるような、素直で柔順な反応だった。

肯定されているのは、むしろ——俺自身なのかもしれなかった。



「おつかえりー、カレン！」

人懐っこい、はつらつとした声が、自室に戻った俺を出迎えた。

慣れ親しんだ相方の姿を見ると、途端に安堵感のようなものが生まれてくる。わが家に帰ってきたような感覚だ。一年もともに寝起きして過ごしていると、友達というよりは家族に近い情を持ってしまふのだろうか。

——家族。

その言葉を思い起こしてしまった俺は、余計な思考にとらわれてしまった。

「……………ど、どうしたの？ 大丈夫？」

突っ立って口を開かない俺に、リタは心配そうな顔で近寄ってくる。あまり気を遣わせてはなるまいと、俺は取り繕うようにようやく声を上げた。

「いえ……………ちよつと、ぼんやりとしてしまつて」

「ホントに平気……………？」

「平気です。……………それよりも」

俺はバッグから、リタに頼まれていた本を取り出した。それを目にした瞬間、彼女の顔がぱつと明るい笑顔になった。わかりやすい反応である。

「本屋で見つけられたので、買っておきましたよ」

「うわーっ！　ありがとう！　読むのが楽しみ……！」

本を受け取りながら、心の底から嬉しそうに言うリタは、とても無邪気で子供っぽかった。フィオナもそうだったが、率直で無垢な感情表現というのは、どこか心が洗われるような感覚を抱いてしまう。

……それだけ、自分の心が穢れていることの証左なのかもしれないが。

ひねくれた思考を浮かべながら、荷物を私物入れの棚に戻していると——テーブルに便箋が置いてあるのが目についた。羽ペンとインクも見えるので、リタが手紙を書いていたのだろう。

「……家族宛てですか？」

「うん。月に一回は手紙を送って、お母さんがうるさいからさー」

面倒くさい、と言うかのようにリタは大げさなため息をついた。

年末年始などにまとまった休暇が与えられたときには、田舎に帰郷する使用人がそれなりにいるものの、平時は手紙で家族とやり取りするのが一般的だった。

「……それだけ、リタのことが大切に心配なんですよ」

「そ、そうかなあ？」

「そうですよ」

例外はまれにあらうが——大多数の親にとって自分の子は、かけがえのない大事な存

在なのだ。元気で過ごしているかと気にかけるのは、当たり前のことだろう。

俺自身は子供を持ったことなどないが、それでも親の気持ちというのは多少なりとも理解しているつもりだった。冷静に過去を思い返せば、あの時、あの人はどんな感情を抱いていたのか、嫌になるほどわかってしまう。

「あつ、そうだ。お金、いくらかかった？」

リタが帳簿用のノートを取り出しながら尋ねてきた。金銭の記録はきちんと取るようにと、親から厳しく言われているらしい。しっかりしているものである。

俺が金額を口にする、リタは走らせていた羽ペンを途中でとめた。顔を上げてこちらを見遣る瞳には、疑うような色が宿っていた。

「……どうしました？」

「どうしたも、こうしたも——過少申告しているでしょ。新書でそんなに安いわけないし」

「どうせ私も読むわけですし、折半でよいと思っただけです」

購入した本の大半は、二人とも共有して読んでいた。だからリタの欲しがる本も、俺が半分は負担すべきだろう。俺のほうに金には困っていないのだから。

「それを言うなら、あたしだってカレンの本を読んだりするじゃない。……それに、趣味じゃないでしょ？ ああいう恋愛モノ、カレンにとつて」

「まあ、大好きというほどではありませんが……。それでも暇つぶしには丁度いいでしょうし、気にしないでください」

「むうー……」

どこか不満そうな声を漏らすリタは、俺の考えに納得がいつていないようだった。あまりに良くされすぎると、引け目や申し訳なさを感じてしまうのかもしれない。

自分は何もしていないのに、必要以上の厚意を受けている——そう思っているのだとしたら、大きな間違いだろう。

俺はリタの目に視線をしっかりと向けると、まるで親が子に言い聞かせるかのように、その言葉を口にした。

「——いつも感謝していますよ、リタ」

きよとん、とした表情が返ってきた。

礼を言われる意味がわからなかったのだろう。リタはすぐに困惑気味な顔色を浮かべると、思いめぐらせるように頬を掻いた。

「え、えつとお……あたし、何かしてたっけ？」

「はい、ルームメイトとして私と親しく接してくれています」

「……ええ？　そ、それだけ？」

「それだけで、私にとっては嬉しくありがたいことですから」

これまでの短くない人生で、学んだことがあった。

かつて学問ばかりに傾倒していた俺は、ろくな人間関係を築けていなかった。そして死を経験し、この新しい世界で二度目の生を授かり、多くの失敗を重ねて、やっと痛感して理解したのだ。

——思考や感情は、見える形にして伝えなければ意味がない。

それは単純なことだが、何よりも大事なことだった。

人間は以心伝心ではない。だからこそ言葉で、あるいは文字で伝える必要があるのだ。多くの哲学者が思想を残したように、あるいは親がわが子へ愛を伝えるように。

「私は無愛想な人間で、仲の良い友達というものが多くありません。……リタも知っているでしょう?」

「それは……まあ……」

なんとも答えにくそうな表情を浮かべるリタ。

必要なこと以外あまり会話をしない俺は、この屋敷で働きはじめた当初から同僚メイドとの関係がよろしくなかった。そして出世とも言える侍女代理者となつてからは、リタ以外のメイドとは交際がほとんど断絶している状態になつてしまつていた。

——べつにそれを深刻に悩むほど、俺は繊細な心の持ち主ではない。

それでも、こうして普通に俺と交流してくれるリタという少女は、同室で寝起きする

ルームメイトとして望ましく素晴らしい存在だった。

「ですから……」

俺はリタのもとへ近寄った。

その纖手を手に取り、そつと引き寄せて——両手で包み込むように握る。まだ成長途中の少女の肌は、柔らかく未熟で、けれども一人前の温かさを持っていた。

この体温と同じくらいのものを、はたして俺の手も持つているのだろうか。彼女の熱と比べるかのように、自分の人間らしさを確かめるかのように——俺は手と手をぎゅつと重ねた。

「私にできることで、あなたに少しでも恩を返せたら。……そう思っています」

それは飾ることのない、素直な気持ちだった。

これだけストレートに語ったのならば、十分に伝わるだろう。そう思いつつ、俺はリタの顔をそつとうかがった。

——その顔は、耳まで朱に染まっていた。

「……か、カレン」

「はい」

「……は……恥ずかしいんだけど、めちやくちゃ」

「リタの好きな恋愛小説のほうが、恥ずかしいシーンが大量にあると思うのですが」
「いや、それとこれとは別だつて!？」

あたふたとする姿は面白いが、あまりしつこく絡むのも良くないかと手を放す。

彼女は解放された手を、まるで鼓動を鎮めるかのように胸に当てた。よつぽど気恥ずかしかつたらしい。

「……どこぞの恋愛小説みたいに、愛していると囁いたほうがよかったですか?」

「もつと恥ずかしいって!？」 というか、カレンは殿方じゃないでしょ!」

「巷では女性同士の禁断の愛を描いた、耽美な小説がひそかに流行っているらしいですが」

「えっ、そうなの?」

「嘘です」

「……………」

頬を膨らませてじつとり睨むリタは、感情表現が豊かでほほ笑ましかつた。

「まあ冗談はさておき、私がリタに感謝しているのは本当ですよ。なので、これからも本の代金くらいは恩返しさせてください」

「……なんか、あたしのほうが恩を貰いすぎな気がするんだけど。いつも朝、起こしてもらってるし」

「それでは、起こさないようにしましょうか？」

「そつ、それは勘弁して!?! 遅刻で減給されちゃう……!」

——他愛のない会話だった。

彼女と交わす言葉は、まるで本当に年頃の少女同士のようで。自然でそつのない、和やかな掛け合いだった。

それを意図しておこなえているということは——多少は成長しているのだろうか。まだ両の手に残る、かすかな温もりを感じながら、俺はそんなことを思うのだった。

004 知者を尊敬することは、尊敬するその当人に
とつて、大きな善である。

「つ、つかれたあ……！」

と、丸テーブルに突つ伏すフィオナ。その様子からは、やっと苦役から解放されたというような感情がにじみ出ていた。

——時間にして、およそ二時間ほどだろうか。

本日の客人である、もと治安判事のモーティマー卿から特別授業をみっちり受けたフィオナは、ようやく地獄の勉強を終えて私室に戻ってきたというわけである。

貴族、などといつてもこの世界では「務め」を果たすことが求められる。したがって、家庭教師や講師を呼んで子弟に学を身につけさせることは、高貴な家の中ではごく当たり前のことであつた。

「……ずいぶん苦勞なさつたご様子で」

同情を少し含んだ声を、俺は彼女にかける。勉強場所であつた応接間に、何度かお茶と菓子を運んでいたのだが、後半になるにつれてフィオナの目が死んだような色になつ

ていたのが記憶に残っていた。モーティマー卿は堅苦しそうな初老の男性で、おそらく勉強を楽しませるような教え方をするタイプでもなかったもので、さぞや退屈な時間を過ごしたのだろう。

「もう、本当に……わたしが判事の道を目指しているみたいに、隅から隅まで過去の判例の講釈を垂れてきて……はあ……」

「それは……お気の毒に……」

「だいたい……法律をぜんぶ覚えているわけでもないのに、あの人はそれをわかつてる前提で教えてくるから——」

愚痴をこぼすフィオナに相槌を打ちながら、俺は紅茶をカップに淹れる。こういう時は、相手の不満に同意して共感を示すのがいちばん良いのだろう。

砂糖の入った瓶の蓋を開けながら、俺は彼女の言葉が収まるタイミングを見て尋ねた。

「……何杯、お入れしましょうか」

「今日は三杯」

「かしこまりました」

いつも砂糖はスプーン二杯なのだが、そのプラス分は勉強の疲れを物語っているかのようである。

スプーンに乗せた茶色の結晶——甜菜から煮出して作られた砂糖を、熱い紅茶に要望どおりの量で投入して、よくかき混ぜて溶かす。いい香りが鼻孔をくすぐった。

俺はできあがったそれを、恭しく彼女の前に差し出した。

「どうぞ。……まだ夕食までは時間がありますので、ごゆっくりなさってください」

「ん……ありがと」

ほっとした表情で、フィオナは紅茶を受け取る。そしてカップに一口をつけると、安堵のような息を小さく漏らした。温かい飲み物というのは、心身を落ち着けてくれるのだろう。

彼女はカップをソーサーに置き、ニッコリと笑みを浮かべると「カレンもお茶しましょう」と俺を誘った。

「では——失礼ながら」

フィオナと相席してお茶を飲む、というのは毎日のようにしていることだった。

主人が使用人を対等な形でもてなすというのは、衆目に触れる場所であればよろしくない行為ではあるが——私生活の中であれば話は別である。とくに女性であれば、プライベートの空間で侍女を友達のような話し相手として扱うのは、さして珍しいことでもなかった。

もう一つのカップに、俺は自分用の紅茶を淹れる。砂糖は加えなかった。甘いのは、

あまり好みではないから。

フィオナの対面に座った俺は、彼女の様子をさり気なくうかがった。少し眠そうな表情をしているが、紅茶をすすると口元に柔らかい色が生まれる。最初に見せたりアクションほど疲労困憊している、というわけでもなさそうだった。

「——法律家には、あまり興味を引かれませんか？」

フィオナが話を振る様子を見せなかったので、俺は無言にならないよう質問を口にしてみた。女性らしい話題が思いつかなかったので、先ほどの勉強とかかわることを尋ねる形となつてしまったが、気まずい沈黙が流れるよりはマシだろう。

俺の言葉に、フィオナは少し悩むように眉をひそめると、ややあつて曖昧な返事をする。

「うーん……。なんというか……想像がつかないっていうか……」

それは、いまだ人生経験の浅い少女の答えとしては、むしろ自然な言葉だった。

貴族の間がなる職業、というのほだいたい相場が決まっていた。魔法が得意ならば、医者か、金銀の生産者か。あるいは魔法にかかわらない仕事であれば、領土の運営上重要なポストである司法官や行政官か。知識と研究欲があれば、大学で学問の道を歩むというのも一つの道だ。

もし、あまり裕福ではない小貴族の出身ならば、大貴族の家の上級使用人として働く

こともあつた。この屋敷で言えば、どうやらミセス・スターンも貴族家系の血を含んだ出身だとか。

いずれにしても――

「実際に目の当たりにしなければ、それがどういうものなのか――わからないことばかりです」

たとえば治安判事が、どうやって仕事をこなして、誰とかかわって、どんな生活を送っているのか。本に書かれている文字、あるいは人が口にした言葉だけでは、治安判事としての生き方を理解するには情報が足りなすぎる。

自分の人生の未来を想像する――などということが、年若い女の子にとって難しいのは当然であつた。

「私自身、こうして使用人としてお屋敷で働かせていただいで……初めて知ったこと、覚えたことがたくさんあります。メイドになるまで、私はメイドの仕事をろくにわかつていませんでした」

それは本当のことだつた。ベッドメイキングの仕方や、使用人としての礼儀作法などを知らなかつたのはもちろん、朝のミーティングの様子や家政婦との上下関係など、初めて学ぶことだらけだつた。たとえ前世の知識と経験があつてさえも、知らないこと、わからないこと、そして及ばないことが山のようにあるのだ。

誰だってそうなのだ。最初から、すべてを理解して生きている者など存在しない。手探りで、悩みながら、必死に道を前に進むのが人間というものだ。

「……お嬢様は立派だと思えます」

「り、りっぱ？」

「はい。むずかしい問題に対して、逃げることなく真剣に悩んでいるのですから」

「ええ……？」

よくわからない、といったふうには首をかしげる。何か成果を出しているわけでもないのに、褒められることの意味がわからないのだろう。

「ただ、俺にとっては賞賛に値するのだ。そうやって不安や憂慮を抱きながらも、逃げ出さずに日々を過ごしているきみは。」

「……カレンのほうが、えらいと思うんだけど。わたしと年齢もほとんど変わらないのに、仕事をきっちりこなしているし」

「いえ……使用人なんて気楽なものですよ。責任も重圧も、貴族の方々と比べたら少ないですし——何よりも自由に生きていますから」

「……自由、かあ」

どこか遠くを見るような目の色を、フィオナは浮かべる。それは羨望だったのかもしれない。

べつに彼女も、どこかへ遊びに行きたいと思えば予定を決めることができるが、だからといって本当に自由と言えるのかは微妙だった。どこに外出するにしても使用人が付き添うだろうし、あまり貴族としてふさわしくない場所にも赴けないだろう。俺のようになりで酒場で過ごすなど、彼女にはできようはずもない。

フィオナはカップに入った紅茶を飲み干すと、冗談めかして笑いを見せた。

「わたしも、やりたい仕事が見つからなかったら……カレンみたいにメイドになろうかしら？」

俺は笑おうとしたが、笑えなかった。無理に笑顔をつくろうとすると、きつとひどい表情になるだろう。

だから馬鹿みたいにまじめな顔で、俺は彼女に返答した。

「……いいえ、それはやめたほうが良いと思います」

「あら、どうして？」

だって、俺と同じような道を進んでほしくないから。

そんな正直な理由を言えるはずもなく、俺はわずかに逡巡してから、フィオナの瞳を見つめながら言葉を紡いだ。

「だって——フィオナ様にお仕えできなくなってしまうから」

それは本音を隠すための、取り繕いの言葉だったのだろうか。

それとも——

……いや、どっちでもいいか。無駄に思考を重ねてしまうのは、俺の悪い癖だ。自分の感情に任せて、自然に話せばいいのだ。まるで年相応の少女のように。

頬を赤くして、どこか戸惑ったような、そして嬉しそうな顔を浮かべるフィオナを眺めながら。こんな純情な彼女を見られるのなら、侍女という仕事も悪くないなど、なんとなく俺は感じた。



——休日を控えた前日に、俺に宛てた手紙が届いた。

差出人は聞いたことのない人物だったが、おそらく先週の酒場で言葉を交わした男性の名前だったのでだろう。文面はひどく簡潔で、事務的な内容だった。『ある御方』の都合がつきそうなので、当日にいつもの場所で対面することになるだろう——という連絡のみ。

それで十分だった。俺の心を掻き立てるのには。

けっして明るくはない感情に支配されながら、けれども刻々と迫ってゆく現実には、俺はどうすることもできなかった。そうしていま——無策で酒場のカウンター席に座つ

ているというわけである。

「……まったく」

俺は自分に呆れるように呟いた。

人間がどれだけ後ろ向きな気持ちになろうとも、時間はひたすら前向きに進みつづけるのだ。そうであるならば、人間も前を向いて道を選ぶのが道理というものだろう。

……だというのに。

これから顔を見合わせる相手が、どんな人物なのかわかっていながら、俺はどう対話すべきであるかを案じていなかった。挨拶はなんという言葉を口にするか？ 最初は何について話題を振るか？ 自分のことはどれだけ話すべきか？ 相手の近況についても尋ねるべきか？ まるで考えていなかった。この時が来るのを理解していたにもかかわらず。

「……いや」

けれども、と俺は思いなおした。

むしろ考えないほうが正解なのではなからうか。恣意に任せて会話をするのが本当は正しいのではないか。想定問答など、これっぽっちも必要ないのかもしれない。

——その思考は、べつに言い訳などではない。誰もが納得する、単純な理由があった。そう…… “親しい関係” の相手と会うのに、わざわざそんな準備をすること自体がお

かしいのだ。初対面の相手との面接ではないのだから。

「……………」

俺は自嘲するかのように口元を歪め、グラスに満ちた液体を喉奥に流した。お湯で割った蜂蜜酒のアルコール度数はそれほどでもなく、酒の酔いに任せて舌を回すことは叶わないだろう。俺は自分の理性をもつてして、事に臨まなければならぬのだ。

いつものように読書をするのではなく、俺は頬杖をつきながら待ちぼうける。ときおりグラスに口をつけ、小さなため息をつき、暇そうに酒場の店内を眺める。ほかの客からしたら、俺はまるで意中の男性を待つ少女のように見えたかもしれない。もつとも、お相手はそんなロマンチックな人物ではなかったが。

「——あー、その」

声が出た。

若くはない男性のものだ。遠慮がちな、迷いのある、どう話しかければよいのか悩むような、そんな雰囲気だった。

……なんだ。

あなたも、俺と同じだったわけか。

どこか安堵のようなものが生まれた。話しかける言葉の準備は、お互いにしていなかったということだ。似た者同士——というのは、当たり前のことだったのかもしれない

い。俺と彼の関係を考慮すれば。

「隣にどうぞ」

俺は穏やかな口調で言った。

年配の男性は、どこかきこちない所作で隣席に腰掛ける。そこで初めて、俺は彼の姿を確認した。

身を覆うマントに、深々と頭を隠すフード。失礼ながら、俺は思わず笑ってしまいそうになった。これでは、まるで不審者ではないか。

「……物々しい装いですね」

「む……いや、さすがに顔を隠したほうがよいと思つてな……」

「逆に目立ちますよ、それでは」

「そうか……?」

フード越しに頭を搔く彼は、どこか愛嬌が感じられた。人の好きがにじみ出たその雰囲気は懐かしく、数年が経つても人は変わらないのだと思わされる。

——かく言う俺は、人間的に変化しているのだろうか。主観ではあまりわからないが、彼の目からはどう映っているのか、少しだけ気になった。まあ二次性徴のただなかにあるので、外見的には成長して変わっているが。

「……席に座って注文をしないのもよろしくないもので、何か頼みましょうか」

「その……こういう場所は、よくわからんのだが、作法とかはあるのか？」

「お上品な礼儀は必要ないので、ご心配なさらず。……私と同じ、蜂蜜酒で構いませんか？」

「強くない酒であれば大丈夫だ」

俺はバーテンダーを呼んで、彼の酒を頼んだ。お湯割りなので、何か支障をきたすほど酔うこともないだろう。彼の口に合えば喜ばしいのだが。

「——久しぶり、だな」

酒を頼んだあとに彼が言ったのは、月並みな言葉だった。会話の順序が少しおかしかったが、それでも再会の重みの表れだったのだろう。俺も同じように、ありきたりなセリフを返す。

「ええ、お久しぶりです。お元気にしていましたか？」

「幸いながら息災だな。最近は家令にいろいろ仕事を任せるようになって、おれも多少はゆとりが出てきた」

「以前はずいぶん、ご多忙でしたからね。……その際は、ご迷惑をおかけしました」

「気にするな。お前のためだ」

「この方は本当に出来た人物だ。改めて、そう思う。俺とは比べ物にならないほど苦勞

を重ね、責任を果たし、そして悩みを経験してきたのだろう。年齢だけではけつして備わらない、人間としての器や貫禄といったものがそこにあった。

尊敬と、そしてかすかな羨望のようなものを抱きながら、俺は蜂蜜酒で唇を湿らす。

「……奥様のほうは、お元氣ですか」

「ああ、いや……それは……」

「——失敬しました。あまり他言したくないことは、口になさらずとも結構ですので」

俺は目を細めながら、そう言葉をかぶせた。

彼の夫人たる、あの人は精神的に不安定なところがあつたので、あまり積極的に尋ねるべきではないのだろう。ましてや彼女に大きな影響を与えたのは、ほかならぬ俺自身なのだ。話題に挙げるのは気まずさというものがあろう。

「……生活のほうは、何か困ったりしていないか？」

「いえ、とくに。寝床と食事が安定した仕事なので、なかなか気楽なものですよ。……少し、申し訳なさを感じるくらいに」

何も不足のない、生ぬるく甘ったれた生活だった。リタのように仕送りも必要ないため、好きな本を買えて、こうして酒に興じることもできる。そうしていられるのは——ひとえに、目の前にいる彼のおかげだろう。

だから、申し訳なさを感じるのだ。俺は何もしていないのに、何かをしてもらって

る。この恩義は、どうやったら返せるのだろうか。妙案はすぐに思い浮かばなかった。

「そうか……。フレオリック卿には、感謝しなければならぬな」

「私にとっては、あなたがもつとも感謝すべき恩人です。いろいろと手を尽くしてくださいました。本当にありがとうございます」

「……何を言う。礼など必要ないだろう。お前は、おれの——」

当然のように、当たり前のように、彼はその言葉を口にした。それを言える彼は、やはり尊敬すべき大人だった。彼と対峙すると、俺はどうしようもなく自覚せざるをえなかった。

——ああ、俺はまだ“子供”なんだ、と。

大人ぶった思考に酔いしれて、うだうだと言葉遊びを繰り返して、それで何かわかったような気分になって、勝手に自己満足をして。呆れるほど、俺は未熟だった。前世と合わせて相当な年月を過ごしたというのに、俺はまだ子供で、大人になりきれていなかった。

「……あなたは、素晴らしい人です」

完膚なきまで打ちのめされたような、どこか清々しい気持ちで俺は言った。

「私は尊敬します。ひとりの人間として、あなたのような方と縁を持ったことを誇らしく思います」

「い、いや、そこまで言うことか……?」

「これでも言葉が足りてないくらいですよ」

俺の率直な賛辞を受けた彼は、気恥ずかしそうに頬を赤らめて、それをごまかすかのようにグラスの酒をあおる。見た目はてんで似つかないが、なんとなくフィオナやリタの恥ずかしがる姿と重なり、俺は内心でちよつと笑つてしまった。

それから二人で酒をちびちびと飲みながら、取り留めのないことを俺は彼と語り合つた。それは自然な会話で、言葉は流れるように出て、お互いに気を遣うこともなく時間が過ぎ去つていった。いつもの酒場で、いつもとは違つたひと時に、俺は心地よさを感じた。——孤独は、そこに存在しなかった。

けれども、物事には終わりが存在する。

ふいに一人の男が後ろからやってきて、恭しく礼をして時刻を告げる。先週、俺に声をかけてきた紳士だった。おそらく、彼の従者なのだろう。

「すまん、そろそろ帰らなくてはならん」

「いえ、お気になさらず。……貴重なお時間を割いていただき、ありがとうございます
た」

「おれのほうこそ。付き合つてくれて嬉しかったよ」

彼は笑みを浮かべた。優しく穏やかな表情だった。そして背を向けて——言い忘れ

たことを思い出したかのように、こちらへ振り返る。

あー、と言いよんだ彼の顔には、少し自信なさげな色があった。うまい言葉が見つからない、口に出してもいいか迷っている、そんな感じの様子だった。

何を伝えようとしているのか、俺はなんとなく察した。だから俺は、自分から言つてやることにした。それが大人らしい対応だと思つたから。

俺はできるかぎりの柔らかい声で、その言葉を口にした。

「時間が合えば、またここで会いしましょう。これからも、あなたと話せるのを楽しみにしています。——お父様」

少しだけ、大人になれた気がした。



自室に帰ってきた俺を、リタはなぜか目を丸くして出迎えた。何か意外なものを見た、という感じである。

「おかえり、カレン……?」

「はい、ただいま。……どうかしましたか？」

服に汚れてもついているのだろうか、と自分のワンピースドレスを見下ろしてみたが、とくに変わった様子はない。髪に手を当ててみても、いつもと変わらぬ感触ばかりだった。リタの反応の原因は、どうやら外見ではないようだ。

彼女は「あ、いや」と誤解を解くかのように手を振ると、自分でも困惑しているかのような口調で言葉を続けた。

「なんか、こころ……いつものカレンじゃない感じに見えたから。雰囲気が違うっていうか……」

「……そうですか？　いつもと変わらないと思いますか？」

俺は適当にそう答えたが、内心ではリタの感性に舌を巻いていた。昼間の酒場での出来事が、俺の感情や気分に影響を与えていたのは明白だった。そういった機微を見逃さない彼女は、さすがは年頃の女の子といったところか。

「なんかイイコトでもあったの？」

「……良いこと、ですか。そうですね。なかったと言えば嘘になるかもしれません」

「えっ、なにに？　何があったの？　教えておしえて」

やけに食いついてくるのは、俺の様子がそれほど普段と違っていたからだろうか。はたして今の俺は、どんな表情をしているのか。ちよつと気になったものの、わざわざ鏡

を確認するのは自意識過剰かもしれない。

俺は荷物を棚にしまいながら、リタの興味に言葉を返してやる。

「べつに、大したことはありませんよ。ただ……めずらしく人と会って、話をしたというだけです」

「……………?!? そ、それって——」

後ろで、衝撃を受けたような声が上がった。そんなに驚くことでもないと思うのだが。たしかに交友関係は狭すぎる俺だが、休日に誰かと会うくらいは普通のことではなからうか。

「カレン……………!」

「は、はい?!」

「その人は……………た、大切なひとだったり……………?」

「そうですね……………。私にとっては、かけがえのない方ですが」

そもそも血のつながった人間が大切ではないことなど、そうそうないだろう。それに彼は、俺にとっては最大の恩人でもある。自分の人生、そして在り方を方向づけた、かけがえのない大事な人物であることは間違いないかった。

だから、はつきりとそう答えたのだが。振り返ると、リタは愕然としたような表情を浮かべて固まっていた。

「……カレン」

「はい」

「恋愛小説に興味ない理由、そういうことだったんだ……」

「はい？」

「そりゃそうね……。現実には彼氏がいたら、必要ないもんね……。うう、この裏切り者……」

「何か勘違いしている様子ですが」

俺は思わず呆れてしまった。が、たしかに恋人と逢瀬していたのだと思い違うのも無理はなかった。十代の若い少女が出会いを楽しむといえ、その手の話が真つ先に浮かぶのも変ではない。

「一つ訂正しておきますよ」

俺は肩をすくめて、彼女に現実を突きつけた。

「“彼氏”ではありません。……残念ながら、私には殿方と恋をする趣味はないものでして」

そもそも歳を取ると、恋などという感情には縁が薄くなるものだ。俺もその御多分に洩れず、やはり巷の恋愛小説に共感するのは容易ではなかった。

愛とは何か。恋とは何か。そんなテーマは、古代ギリシアの頃から哲学者が論じてい

たことだな、と大学時代の勉学をふと懐かしく思い返す。この世界でも、きっとその類を語った哲学書がたくさんあるのだろう。たまには小説以外にも、そういった本を探してみるのも良いかもしれない。

そんなことを思いめぐらす俺に対して、リタは――

「彼氏じゃない………ということは………あつ」

一つの真理にたどり着いたかのような声を上げると、彼女は納得したように手を小さく叩いた。

「そっかあ………この前のこと………なるほどなあ………」

「………大丈夫ですか、リタ？」

「うんうん………カレンって、そんな感じの気がしたんだよね……。だって、妙に………異性のことに興味なさそうだし………」

ぶつぶつとうわ言のように呟く彼女は、ずいぶんと思考を斜め上に飛躍させているようだった。何を考えているのか知らないが、きちんと話を伝えておいたほうが良いだろうか。

………と、思ったが。俺の父親のことは、あまり他言すべきではないだろうし、詮索されるのも避けたほうが無難だった。彼について聞かれないためにも、このまま勘違いしてもらったほうが好都合かもしれない。

——そういうわけで。

俺はとくに訂正しないことにした。

「カレン……！」

「はい」

「あたし、応援しているからね……！　そ、そういう偏見とかもないから大丈夫、安心して」

「はい。ありがとうございます」

想像力豊かなリタを眺めるのも、それはそれで面白かった。彼女の頭の中では、俺はいつたいどんな人物と情事を重ねているのだろうか。他人の視点から見た、カレンという人間にお似合いな相手というものは少し気になった。

俺はリタと同じように、冗談半分で想像力を働かせて——

「で、でも……そういうのもワクワクするっていうか、禁断の恋って感じで……ウッフ……いいなあ……」

うつとりとした表情で、きゃーきゃーと妄想に浸るリタは、どうやら遠いところへ旅立ってしまったようである。

もつとも——正直に言ってしまう俺も、彼女と同レベルだったのかもしれない。

…ほんのちよつとだけ。一瞬だけ。

艶やかな美しい金髪に、人形のような可愛らしい顔の、いつも身近に感じている少女の姿を思い浮かべてしまったから。

005 われわれは、旅の途中にあるかぎりには、これまでの道よりも、これからの道をより善いものとするように、努むべきである。

——ところで、使用人がメイド服などのお仕着せを与えられる理由は何か。

もちろんキャップやエプロンなどに実用的な意味もあるのだが、いちばんの理由は「身分の明示」だろう。かりに使用人が私服で仕事をしていたら、屋敷の外からの客人がやってきた時にその人が困るのだ。誰が貴人で誰が使用人か見分けが付かず、当惑させてしまうかもしれない。

だから女性使用人のほとんどはメイド服を着て仕事をしているし、執事や家政婦といった私服で活動する上級使用人たちも、あえて地味な服装や流行遅れの装飾をすることによって、主人たちよりも目立たぬことを心掛けている。うっかり女主人と家政婦を間違えてしまった、などという失敗話はたまにあるものの、基本的には見た目や振る舞いを注視していれば、ちゃんと判別できるはずである。

そういうわけで、使用人の服装というものはたいへん重要なことなのである。

……はずなのだが。

「うーん、やつぱりカレンが着るとなんでも似合うわね……!」

浮き立ったような口調で、フィオナが俺の姿を見ながら言った。ずいぶんと楽しそうな笑顔である。その表情には、年若い少女らしい明るさが満ちていた。

「お嬢様」

「うん? なに?」

「——メイドの私がお嬢様のドレスを着るのは、いかがなものかと思うのですが」

「ええー? いいじゃない」

俺の言葉は、簡単に聞き流されてしまう。今の彼女は、まるで人形遊びに夢中になっている幼子のようなだった。厳しい母親との関係や、難しい学問の勉強など——日頃のストレスが溜まっている反動なのだろうか。

——フレオリック家と縁ゆかりのある貴族の誕生日パーティに、フィオナも参加することになったらしい。

だからドレスをどうするか、今から決めておかなければならないのだが、立て鏡だけでは後ろ姿を自分で確認できない。そこで背丈や体格がほぼ同じの俺に試着させて、いろいろな角度から見た目を観察したい——というのがフィオナの言い分だった。

もちろん、そんな言葉がほぼ建前なのは明らかだった。

自分がその服を着たらどうだろうか、という観点などは早々に彼方へ消えてしまったようで、今の彼女は俺がいろんな服に着替えることを楽しんでるようだった。これだけ無邪気に喜んでるフィオナを見たのは、久々かもしれない。

「ほらほら、カレンも見てみなさい」

そう言って、彼女はこちらの後ろに回ると、ぐいと俺の体を姿見の鏡へと向けた。

——落ち着いた黄色の、フリルにも似た段構造^{ブラウンス}の飾りが膨らみを強調するティアド・ドレス。

簡素な服装を好む俺にとっては、あまりにも見慣れない姿だった。愛らしい服に身を包んだ少女は、どこか遠い世界の別人に見える。

その鏡の中の人物で俺らしいと言える部分は、愛想のなさそうな冷たい表情だけだ。笑みを浮かべれば、きつと多くの者を魅了する女の子になるのだろうか——残念ながら中身が中身だった。

「ね？　かわいいでしょ？」

「お嬢様がご着用されたほうが、可憐で素敵ですよ」

そう即答すると、鏡に映ったフィオナの表情が少し恥ずかしそうなものになる。

「……もう、すぐ真顔でそういうこと言うんだから」

「本心ですから。可愛らしい服装は、私よりもお嬢様のほうが似合います」

「……………」

フィオナは一瞬むっとしたような顔色を浮かべると、しばらく睨むような目つきを保ち——ふいに両手を俺の頬へと伸ばした。

そして口角付近の肉をつまむと、ぐいっと斜めの方向へ引つ張り上げる。

……どうやら、笑顔にさせたらしい。

「おじよおさま、いたいれふ」

「もつと笑ったほうがいいと思う、カレンは」

「……………そお、れすね」

なかなか滑稽な滑舌のまま、俺は彼女の言葉に同意した。無愛想な人間と、愛嬌のある人間。どちらが魅力的で、人生において有益かといえれば、間違いなく後者であろう。ただ、ひとの気質というものは千差万別である。意識せずとも笑顔を振りまけるタイプもいれば、あまり感情を面に浮かべないタイプもいる。言うまでもなく俺は無表情が基本だし、ミセス・スターンなんかと同じタイプだろう。

だから、笑ったほうがいいと言われても——実践するのは難しかった。

「……………」

ふとフィオナの手が離れた。解放された頬の肉は、もとの位置へと戻る。すなわち、普段どおりの無愛想な顔であった。

それを見た彼女は、瞳にどこか悲しそうな色を宿した。きつと心の底から思っているのだらう、俺が笑顔を浮かべてほしいと。その心遣いはとても嬉しく、そして尊く、何よりも愛おしかった。

——それなりの年数を生きていると、相手の心情というものに気づけるようになる。いつも寝起きをともにしているリタの、何気ないやり取りに含まれる友愛の情。先日に出会った父の、言葉や所作の節々に現れる親愛の情。そして——今そばにいるフィオナの、どこか切ない微妙な距離感の心情。

わかっている。思考癖のついた俺の頭は、すぐに理解している。積み重ねられた経験と知識が、自分に向けられている気持ちを的確に解釈している。

「お嬢様」

昔は、わかっているながら適切な行動を取ることができなかつた。ただ、今は少しだけ大人らしくなれたはずだ。

だから、きちんと伝えてあげよう。

俺は後ろを振り向いた。

鏡越しではなく、正面から向き合つて。

そつと、ふんわりと、やさしく——

——母親が子供にそうするかのように、愛情を込めて抱擁した。

「私のことを想つて、そう言つてくださつていると——わかつていますよ」

俺には、笑顔で感情を伝えるなんて向いていない。

だつたら、表情ではなく言動で示せばいい。簡単なことだつた。

「お仕えしている方に、こんなにも温かく案じていただけるのは——とても嬉しいこと
です。……ありがとうございます」

服の布越しに、柔らかな体温を感じた。

ちらりと視線を横に向けると、フィオナの真つ赤な耳が見える。きつと、いつも以上
に赤面しているのだろう。

——フィオナが母親から抱きしめられている姿は、見たことがなかった。

だから間違いなく、慣れていないに違いない。

でも、だからこそ大事なのだ。

誰もが相手に感情を抱いている。悪い感情、良い感情、あるいはどちらとも言えない
複雑な気持ち。

でも、それらは伝えられなければ、個人の心の中で終止してしまう。

たとえば、母親が抱いている本当の気持ちは——理解できる形にしなければ、きつと

娘は気づけないだろう。

そして娘がどんな思いでいるのかも、まったく同じように。わかるようにしなければ、意味がないのだ。

——もう少し、彼女の胸をこちらに引き寄せる。

言葉よりも、表情よりも、行為はたやすく想いを伝えられる。その大切な事実を、この若い少女に知っておいてもらいたかった。

「いつも心より感謝しております、フィオナ様」

笑顔など必要ない。

そんなものがなくても、愛情は伝えられるのだから。

「——」
言葉にならない、熱のこもった吐息が首筋を撫ぜた。

唐突な抱擁と、小恥ずかしい言葉に、彼女の心境が追いついていないのかもしれない。少し意地悪だったかと思っただが、先ほど頬をつねられた仕返しということでお相子だろう。

黄金の美しい髪を眺めながら、しばらく俺は静止した。フィオナも抱きすくめられたまま、動こうとしない。彼女の小さい呼吸音と、胸の高鳴りだけが世界に響きわたって

いた。

——わずかに、違和を感じた。

ほんのちよつと、微妙に食い違っているような感覚。それが何に由来するものなの
か。

母親のぬくもりに包まれた子供が、安堵するのとは違う。むしろ激しさを増す彼女の
鼓動は、まるで恋人と抱き合った時のような——

「——なんて、とつぜん失礼しました」

ぱつと体を離し、冗談っぽい口調で取り繕う。

やはり、いきなり抱きしめるのはやりすぎだったろうか。リタの時のように、手を握
るくらいにしたほうが良かったかもしれない。

そんな反省をしつつ、おそろおそろの表情をうかがった。

なんてことはない。予想どおりの表情だった。

がちがちに固まった顔に、ふらふらと揺れる視線。これだけのぼせ上った様子を見せ
られると、申し訳なさを覚えてしまう。

「あの、フィオナ様。大丈夫でしょうか」

大丈夫ではなさそうだが、いちおう尋ねるしかなかった。

「……だ」

「だ………？」

「だだだ、だ、だいじょうぶ」

「大丈夫ではありませんね」

「いまだ顔が赤いままの彼女は、回復するまで少し時間がかかりそうだ。」

「かか、か、カレン」

「はい」

「ここ、こんどハグするときは、先に言ってね？」

「はい、かしこまりました」

俺は恭しく礼をして拝承した。事前通達してから抱きしめるなど意味不明すぎるやり取りだが、この場では突っ込まないでおこう。

まあ、とにかく。嫌がっている感じではなさそうなので、一安心といったところだろうか。

はたして「今度」などあるのか、という疑問も浮かんだが——考えるのは野暮というものだった。

「ところで、お嬢様。けつきよくドレスは、どれになさるご予定で——」

「え？ あ、うん。なんでも、いいんじゃない………？」

「なんでもよろしくはないと思いますが」

「か、カレンにいちばん似合うドレスで……」

「着ていくのはフィオナ様なのですが」

その日はけつきよく、まともに服を決定することができず。

——あまり感情をストレートに伝えすぎるとよくないかな、と俺は少し思いなおすのであった。



週末、いつもの隣街で買物と昼食を済ませ、相変わらずの足取りで見慣れた酒場に入った俺は——先客の存在に驚いて立ち尽くしてしまった。

いつも座るカウンター席の端っこから一つ隣に、フードをかぶった男が腰掛けていて。それが誰なのか考えるまでもあるまい。まさか、先に来ているとは思わなかった。

「——お待たせしてしまいましたか？」

そう尋ねながら、俺は彼の横に座った。待ち合わせなど約束していなかったが、相手が俺と会うために待機していたのは明白だろう。

俺にちらりと顔を向けた彼——父は、柔らかなほほ笑みを浮かべて答えた。

「いや、さつき来たところさ」

「そのセリフ、あまり説得力がないですよ。グラスの中の酒が半分以下になっていますから」

「……よく洞察しているな。さすがだ」

感嘆したように言ったあと、表情が苦笑のようなものに変わる。彼は酒好きな人間ではないので、飲むペースはそれほど早くないはずだ。それを考えると、けっこう前からここに座っていたのかもしれない。

けっして暇人でもないのに、こうして俺との時間をできるだけ持とうとしているのは——ひとえに、俺が血のつながった娘だからだろう。それだけ大事なのだ、親にとって子供というものは。

自分のぶんの酒を注文しながら、さて何を話そうかと思案しつつ——俺はふと思い浮かんだ話題を口にした。

「……ボスウェル卿の誕生日パーティーがあるそうですね」

「ああ、それか。今年でちょうど五十路だから、盛大に祝うそうだ。おれも招待されてしまっているから、行かねばならん」

まったくもって面倒くさい、と言うかのような口調で父は話す。もともと貴族仲間との社交に消極的な彼にとっては、わざわざ長時間かけてよそに赴くのは苦痛なのだろう

う。かといって人付き合いを断つわけにはいかないところが、貴族の家の当主としてつらいところであった。

「フレオリック家の方々と向こうでお会いしたら、よろしく願います」

「もちろんだとも。いつも世話になってるからな」

「それと、これは個人的なお願いです……三女のフィオナを見かけたら、何か言葉をかけてやってください。美しくて愛らしい、いい子ですから」

「……？ それは構わんが……フレオリック卿の息女とは、仲がいいのか？」

「仲がいいも何も、私は彼女の侍女役ですよ」

そう言った直後、酒を嚙下していた父はゲホゲホとむせた。どうやら事情を把握していなかったらしい。彼は赤い顔で何度か咳をしてから、ようやく改めて口を開いた。

「……普通のメイドとして雇われている、という話だったはずだが」

「そのつもりだったのですが、彼女の侍女が急に退職して代わりが見つからなくて。私が代わりに宛がわれた、というわけです」

「……いつからだ？」

「もう半年以上前になります。いまだに新しい侍女を雇うという話も耳にしないので、いずれ私が正式に侍女として採用されるのでしょうかね」

使用人の労働契約の更新は基本的に年単位なので、おそらくその時に侍女代行のメイ

ドから侍女に変わるのだろう。まあ数か月先の話だが。

それにしても、父が俺の現状を知らなかったのは意外だった。屋敷での生活について、探ろうと思えばいくらでも探れただろうに。そうしなかったのは——俺の平穩のためだろうか。

いちメイドとして。ただの平民として。静かに生きる道を作ったのは、ほかならぬ父だった。

——貴族の令嬢としての自分。

その立場を演じることができず、周囲に違和をまき散らしながら生きてきた俺は、母が心労で病みがちになったのを契機に己を消すことを求めた。

幸いながら貴族の間では、養子縁組によつて家同士の結びつきを強める行為が珍しくないで、それを利用する形となった。まず父が懇意にしている信頼のおける、家名の小さい他家に養子として移り、そこからさらに無名の家へと籍を移す。そんな家柄の口ンダリングめいた行為によつて貴族としての自分を成り下がらせ——最終的に、フレオリック家のメイドという職に就いたというわけである。

無名貴族の、さらに魔法の才もないらしい娘なら、平民職に落ちぶれても無理はない。用意周到なストーリーは、実際に驚くほどうまくいった。フレオリック卿以外の屋敷の人間は、誰も俺がもともと名のある貴族の生まれだとは思わないだろう。

「しかし——よかったのか？」

父は真剣な顔で尋ねた。侍女という立場で、と言っているのだ。

家政婦のミセス・スターンが貴族家系の出身であるように、高名な家では上級使用人も貴族の家柄であることは珍しくない。つまるところ、フレオリック家の息女の侍女という地位は「平民」よりも「貴族」に近い存在なのだ。

貴族であることを捨てるためにメイドになったのに、そこから貴族に近い場所へと戻っている。

それは完全に矛盾だった。一貫性のない、ふらふらとした道筋だ。自分でもでたらめな生き方だと感じている。

「……………」

俺は言葉を探すように視線を宙に泳がせたが、どうにも上手い説明が見つからない。困ったように頭を搔いて、そして思い出したかのようにバッグを漁り——俺は馴染みの木箱を取り出した。

「……………吸ってもいいですか？」

蓋を開けて中身を見せると、父は驚いたように目を見開いた。その瞳には、わずかに動揺のようなものが浮かんでいる。どうやら愛娘が煙草に手を染めているのがショックだったらしい。

「煙草はお嫌いでしたっけ」

「ああ、いや……。付き合いで吸いはするが、自分からはあまり。どうも煙を吸い込むとというのが好きになれなくてな」

「その心持ちは素晴らしいかぎりです。酒や煙草なんて、やらないに越したことはありませんよ」

俺は肩をすくめながら言った。それがわかっているというのに、依存性のある嗜好品を好むのは非常に馬鹿げている。あまりにも不合理で——矛盾していた。

「——」
紙巻き煙草を手にしたが、バーテンダーはこちらに目を向けていないので気づいていないようだ。声をかけようと口を開きかけた時——

「火なら、おれが点けるぞ」

「……：そういうえば、そうですね。そっちのほうが早い」

父の言葉を聞くまで、その手段が思いつかなかったのは、俺が「貴族ではない自分に慣れすぎてしまったからだろうか。」

日常生活に便利な魔法、などという存在はすっかり忘却していた。そう、貴族は火をとますのに火種など必要ない。己の意思によって、容易に炎を生み出すことができるのだ。

……それができない貴族、というのも存在するが。

フィオナの姿を脳裏にかすめながら、俺は煙草を父のほうへ掲げた。

巻かれた紙の先端に、彼は人差し指の先を向ける。一瞬、空間が霞んだように見えたあと、すでに煙草には火が点いていた。炎を思い描き、念じればそれだけで実現する。科学的見地からすれば納得しがたく、道理に背いているそれは——まさしく魔法だった。

世界には不思議なことが満ちている。

なら、人生だって不思議だらけに決まっている。

俺の歩んできた道に説明がつかないのは、あるいは必然だったのかもしれない。まるで魔法のように。

「年月というものは、ひとの心を少しずつ変えてくれるようです」

俺は煙を口から吐き出しながら、そうぼつりと呟いた。

昔のようにくだらないことにこだわりの、悩み苦しんだ自分は、もうどこにもいなかった。凧いだ海のような心境、とまではいかないが、驚くほど平穏で静かな毎日を送れている。

だからだろうか。余裕ができて、他人についてよく考えられるようになった。

いつもそばに仕えているフィオナ。彼女が何を考えているのか、どんな心境でいるの

か、何を求めているのか。ここ最近はすぐに察せられるようになった。侍女、という職は俺にとつて、意外と天職なのかもしれない。

「後悔の多い人生を送つてきました。……あの時、ああすればよかつた。そんなふうに思つたことは、幾度もあります」

「……それは、おれも変わらんさ」

俺の言葉に同意しながら、父はグラスの酒を傾けた。

もう四十後半の彼は、俺よりもずっと長く人生を歩み、多く苦労を経験してきたはずだ。領主の家の長男という立場が、どれほど大変だったのかは想像にかたくない。

だが——そんな積み重ねがあつたからこそ、父の優しさや穏やかさは培われたのだらう。

「それでも、後悔の上に自分は成り立っています。……これまでの道よりも、これからの道を大切にしたい。私はそう思っています」

「……………そうか」

短い、重みのある頷きだった。

無言の時間が流れる。ほかの客たちが楽しげに談笑するなか、俺は黙つて煙草をふかし、父は酒をちびちびと口にしていた。深閑としたひと時だが——どこか心地よい静寂だ。

やがて煙草の火が手元に近づいたところで、俺は吸い殻を灰皿に押し付けた。

「——ひとつ、お聞きしたいことがあります」

ふと思いついたことを尋ねたくなり、俺は沈黙を破った。

こんなことを父親に聞くのもどうかと思うのだが、せつかくの機会だ。子供を持つ親に、ご意見をうかがうのも悪くないだろう。

「もしあなたの子供が、魔法の才能に欠けていたとしたら——あなたは、その子を疎みますか？」

魔法とは、貴族の証だ。たとえば下級貴族の出身でも魔法の才に優れていたら、高名な家柄と婚姻を結んだり、あるいは養子となったりすることが当たり前のようにある。それだけ重視されている、というわけである。

——その能力が欠如していたならば、親はどう子供を思うのだろうか。

質問をぶつけられた父は、おそらく意図を察したのだろう。フレオリック卿の末娘がろくに魔法を使えないという噂くらいは、耳にしていたのかもしれない。

彼は真摯な顔つきで、まるで自分の娘を想うかのような声色で、その言葉を口にした。「疎むわけがないだろう。——子供を愛さない親など、いるわけがないさ」

予想どおりの答えに、俺は「それでしようね」と酒を啜りながら頷く。

ただ、ほんの少しだけ。やり方が下手だったり、思い至らなかつたりするだけなのだ。

あの親子の関係が、善いほうへ向いてくれることを——俺は心の底から願うのだった。



「——カレンって、休みはどう過ごしているの？」

いつもの昼過ぎのティータイム。対面のフィオナが、ふいにそんなことを尋ねてきた。

プライベートに関する質問、というのは、ここ最近になって頻繁に聞かれるようになった。それはおそらく、以前よりも親しきが増した証左なのだろう。あまり自分から話題を出すのは得意ではないので、こうして向こうから話しかけてくれるのはありがたかった。

俺は「そうですね……」と呟き、カップの紅茶の水面を眺めながら小考した。

正直なところ、休日といってもやることが同じルーチンとなっているので、まったく面白みのない過ごし方だった。おまけに大半の時間は酒場に入り浸っているので、年頃

の少女に語ってもよいものか疑わしい。

それでも嘘偽りを口にするのは本意ではないし、何よりも相手がこちらに興味を抱いて知りたがっているのだ。

だから俺は、やはり素直に伝えてみることにした。

「——いつも隣の街へ馬車で行くのですが、毎回かならず書店に立ち寄っていますね。同僚のメイドから頼まれたものを買うこともあれば、自分が気になったものを買うこともあります」

「へえ……！ カレンはどんな本を読むの？」

「推理小説が多いですね。……お嬢様にとつては、俗っぽく感じられるかもしれませんが」

情事を描いた恋愛モノや、犯罪を描いた推理モノは、貴族の界限からするとかなり低俗なジャンル扱いである。大衆向けの小説の文学的地位が確立されるのは、まだまだ先のことだろう。

フィオナは意外そうな目の色を浮かべて、くすりと笑った。

「なんか意外かも……。カレンだったら、小難しそうな本を読んでいそうなイメージだったから」

「……哲学書も嫌いではありませんが」

「うーん、わたしはそれ苦手」

フィオナは紅茶を啜りながら苦笑した。

貴族の基礎教養に哲学も少し入っているのだが、さすがに年若い少女にはウケが悪いのだろう。ああいうのは、年を取ってからでないと理解できない部分が多いものである。

「本屋以外には、どんなところに行ったり……？」

「飲食店で昼食を済ませて……あとは、酒場で時間を過ごすことが多いですね」

「さ、酒場？」

目を丸くしたフィオナの表情は、思ったとおりの反応だった。やはり十代前半の女性に酒場というのは、少々ミスマッチな組み合わせなのだろう。驚かれるのも無理はなかった。

「あまりお金がかからず、座って時間を過ごせる場所というと、酒場くらいなものですか」

「……お酒も飲むの？」

「ほんの少し、ですが。蜂蜜酒などを飲んだりしています」

「へええ……」

彼女にとっては見知らぬ世界の話だからだろうか。どこか物珍しそうに、そして楽

しそうに笑みを浮かべている。

「わたし、お酒は本当に苦手だから……飲めるのつてすごいなあ」

普段はともかく、祝い事などの席では若年者にもアルコールが振る舞われることがある。貴族のような上流階級だと、もっぱらワインが提供されるのだが——それなりにアルコール度数があるので、酒に慣れていないと嗜めないのだろう。

「けっこう前になるけど……。新年の祝い酒を飲んだ時なんかは、すぐフラフラになってベッドで休んでいたのよね。お酒を飲んだあとは絶対に頭が痛くなるし」

「体質によりますからね。……お湯で割ったりすると、飲みやすくなったりもしますが」「そうなの？ ……じゃあ、いつか試してみようかしら。寝酒として、ちよつとくらいなら大丈夫でしょうし」

その時は付き合つてね？ と笑うフィオナに、もちろんです、と恭しく即答する。主人に仕える侍女として、なかなか板についてきたやり取りだった。

そんな話をしながら、紅茶の残りも少なくなつてきた時——

「ねえ、カレン」

ふいにフィオナが、真面目な顔つきで口を開いた。その視線はわずかに下向いていて、ほの暗い気持ちがあるように感じられた。

「この先……数年後や十年後のわたしって、どうしているのかなあ」

漠然とした疑問だった。だが、少女にとってはリアリティを帯びた問いでもある。明確な目標があるわけでもなく、義務的に勉強をしたり作法を学んだりしている彼女にとっては、見通せない未来はひどく不安なのだろう。

俺がどう声をかけるか迷っていると、フィオナはこちらに真摯な瞳を向けて尋ねてきた。

「カレンは——自分が何年後にどうしているかって、予想できたりする？」

「……いえ。人生は何が起ころかわかりませんから」

俺がこの世界に生まれ、今こうして彼女の対面に座っていることなど、いったい誰が端倪たんげいできただろうか。すべては不確定で、不確実なのが人間の生というものだ。

「先のことなど断言できませんが——」

ただ、ひとは行動を選択することができる。確固たる意志があれば、それに基づいた未来が実現する可能性は大きくなるだろう。

少なくとも、現在の俺が抱いていて、そして今後も続いてほしいと願っていることは——
「ずっと、フィオナ様のおそばにいられたら……。私はそう思っています」

彼女が嬉しそうに笑顔を浮かべ、楽しそうに言葉を紡ぎ、そして恥ずかしそうに頬を赤らめる——そんな姿を見つづけるのも悪くはない。

この世界で生きる意味に、悩んだのはもう過去のことだ。

ただ、今は。こうして彼女と時間を過ごすことが心地よかった。この穏やかな時間がいつまでも続いてほしいと、俺ははつきりと願っていた。

「……………」

フィオナは自分の頬に手のひらを当てて、どこか呆然としていた。赤面した肌は、きつと熱くなっているのだろう。

感情が豊かなしぐさは、彼女の魅力的な部分だった。俺自身があまり情緒を表に出さないタイプだからこそ、そんな人間味あふれる彼女に惹かれるのかもしれない。

「カレン……………」

「はい」

「そ、それって……………な、なんか……………求婚の言葉みたい」

そう言った直後、フィオナは恥ずかしいのか目線を斜め下に向けた。その反応は、本当に愛の告白を受けたかのような。良家の生娘にとっては、少し刺激的なセリフだったのかもしれない。

俺はほほ笑ましい気持ちを抱きながら、ゆっくりと口を開いた。

「フィオナ様は……………誰かから愛された経験はございますか？」

「な、ななつ、なにかしら、突然……………」

「まじめな質問ですよ」

「……………」

ようやく落ち着きを取り戻しはじめたのか、フィオナは目線を俺のほうへ戻すと、記憶をたどるような口調で語りはじめた。

「うーん……………そもそも、同年代の男の子と出会う機会が少ないから……………。園遊会なんかで他家の子と話したりすることはあっても、そこから進展したりとかは……………ないし」

彼女が言及しているのは、異性のことについてだった。それも無理はないかもしれない。まだ「愛すること」の意味を、よくわかっていないのだろうから。

だからこそ俺は、彼女にそれを少しでも知ってほしいのだ。

「——私はいま、愛されています」

「え……………」

どこかシヨックを受けたような表情を浮かべるフィオナだが、勘違いされないように言葉が続けよう。

「同僚である相部屋のリタから、たまに顔を見合わせる父から、そして——」

俺はフィオナの顔を、つとめて優しく見つめた。

「あなたからも愛されていると思っっています、フィオナ様」

いつもともに過ぐす中で、彼女の好意的な感情はたしかに伝わっていた。ただ異性に

胸を高鳴らせるだけではないのだ、愛情というものは。もつと穏やかな、日常的な愛が、人間の営みには存在する。それをフィオナには、感じ取ってほしかった。

「……………」

息を詰まらせたように沈黙する彼女は、やがておずおずと言葉をこぼした。

「…………カレンって」

「はい」

「なんだか…………大人よね、すごく」

「そうでしょうか」

もとより子供と大人の定義など曖昧なものだが、少なくとも彼女にとつてはそう感じているのだろう。まあ言われて悪い気分ではない。

フィオナはカップの紅茶を飲み干すと、どことなく自信がなさげに顔を俯かせた。そして何かを確かめるように、目線だけこちらに向ける。

「わたしも…………愛されているのかな…………？」

その問いに対して、俺の答えは何一つ迷うことがなかった。

彼女の両親や姉妹の内心については代弁できないかもしれないが、自分の心情だけは確実に明言することができる。

だから、俺はためらいなく彼女に言葉を紡いだ。

「私はあなたを愛していますよ、
フィオナ様」

006 過ぎた日の善いものごとを忘れ去れば、その人は、まさにその日に、老いばれる。

温かく穏やかな陽光が、部屋を隅々まで白く彩っていた。

いつものポットや水差しを乗せたワゴンを固定すると、俺はベッドのほう——ファイオナのもとへは行かず、窓際に誘われるように足を運んだ。

ガラス越しに空を眺めると、雲一つない快晴が広がっている。その清々しい光景のなか、鳥たちが美しいさえずりを奏でていた。安らぎを感じる芸術的な早朝に、いつも硬い俺の頬がわずかに緩んでいることに気づく。

「ん……………」

鳥の音色に混ざって、かすかなうめき声が上がった。そろそろお目覚めになつてもらう頃合いだろう。俺はゆっくりと、ベッドのほうへと歩み寄る。

今日は寝相が少し悪かったのか、布団が腰のあたりまでずり下がっていた。上半身をさらけ出しながら、すやすやと寝入っている彼女の姿は、なんとなく幼さと可愛げがあつて心を和ませる。

そのまま眺めていても飽きないくらいだったが——残念ながら、起こさないわけにはいかなかった。

「フィオナ様」

その声をかけながら、俺は身を乗り出して彼女の肩に触れる。

「朝ですよ」

少し揺らすと、フィオナのまぶたが微動する。小さなうなり声のようなものを上げながら——暗中で物を探るかのように、彼女はおもむろに両腕を伸ばした。

その華奢な上肢は俺の脇を通り抜け、そのまま背中の手が乗せられる。彼女の夢の中では、枕か人形でも抱いているのだろうか。まるで縋りつかれるような格好になったかと思うと——すぐに力を込められて、俺は彼女の胸元に引き寄せられてしまった。

いつぞやにも、同じようなことがあったな。

そう思い出しながら、けれども抵抗できずにフィオナの半身に覆いかぶさる。頭をぶつけずに済んだのは幸いだったろう。

——体と体が重なりあい、柔らかな感触が伝わる。

薄いネグリジェ越しの彼女の肌は、心地のよい体温だった。人形のように抱きしめられても、あまり不快感はない。柔らかな少女の体は、どこか甘い肉感があった。

視線のすぐそこには、彼女の頭がある。真横から眺めると、端正な鼻梁がよく確認で

きた。今日のような明るい朝には、いつそうよく映える美貌だった。

「お嬢様」

声をかけても、寝ぼけているのだろう。そのまぶたが持ち上げられる様子がない。ただ代わりに、俺の背に回された腕が少し強まった。

——あたかも恋人同士がするかのような抱擁。お互いの胸が形をわずかに崩して密接した。

その柔らかさは、俺の胸が大きくなったからだろうか。それとも、彼女のものが成長したからだろうか。あるいは、両方かもしれない。

俺を抱き枕にするフィオナは、幸せそうに口元を緩ませていた。まるで母親の胸のうちで安堵する、小さな赤子のようだ。穏やかで、そして無垢な表情だった。

目線を彼女の側頭部にずらすと、金髪に埋もれたものが見える。婉然とした、少女らしい耳朵が横たわっていた。その奥の小さな穴に、俺はゆっくりと唇を近づける。

「——起きて、ください」

間近で紡いだ音は、彼女の鼓膜をはつきりと震わせたのだろう。聴覚への刺激は、寝坊助な脳をようやく覚醒へと向かわせる。フィオナはどこか悩ましげに、うめくような声をこぼした。

目覚めまでは、もう一押しだろう。

もういちど、起床を促す言葉を耳元で囁こうとした時――

「う……………ん……………」

フィオナが、ふいに頭を動かした。

顔を横へ……………つまり、俺のほうへと。だが抱きすくめられている状態では、それを避けることなどかなわない。

――傾けられた彼女の頬が、俺の横顔と接触した。

繊美だが柔らかな、温かい肌。服越してではない、生身の触れ合い。お互い体温はそう変わらないはずなのに、重なりあった頬は熱を帯びているように感じた。

肉体同士が密着し、二人の温度が共有されるなか――ふと、くすぐったい心地を抱く。フィオナの吐息が、俺のうなじを湿っぽく撫でていた。優しく愛でるかのような感触は、情緒的な愛撫だった。そのえも言われぬ官能に目を細めながら、俺はふたたび口を開いた。

「フィオナ様。朝ですよ、起きてください」

「……………うーん……………?」

どうやら、ようやく意識が浮上してきたらしい。

「お目覚めでしょうか」

「……………」

声をかけてみるものの、彼女は無言のままだった。ただ、その体温が少し上がった気がする。密着した胸と、触れた頬から、熱い血の巡りが感じられた。

ややあつて、フィオナは呟くように言葉を漏らした。

「カレン……………」

「はい」

「……………もうちよつと……………ねていい?」

「だめです」

そう答えると、フィオナは「けち……………」と名残惜しそうな顔で、俺の背に回した腕をほどいた。やっと解放された俺は、ゆつくりと上体を持ち上げる。体同士が離れゆくなか、フィオナは淑やかに目を伏せていたが——その瞳には、どこか艶っぽい色を宿しているようにも見えた。

……………少しだけ。

以前よりも、フィオナが大人びてきたように感じる。

それは肉体の成長ゆえだろうか。それとも、少女から女性として移行する精神的変化があつたからだろうか。答えを出すのは容易ではなかった。

そんな、つまらないことを考えながら——フィオナの朝の支度を手伝う。

顔を洗い、白湯で喉を潤し、服を着替えるという、いつもと変わらない手順。毎日、繰り返している作業的なやり取りである。だが——最近では、彼女の反応に微妙な違いが生まれていた。

とくに着替えの最中、服を脱いで素肌が曝される時。かならず胸を見せないようにするし、こちらの視線を気にするような素振りをする。同性である侍女に対して乙女の恥じらいを浮かべるといふのは、貴族の子女にとつてはあまり一般的なことではなかった。

「——向こうでね」

フィオナは化粧台の椅子に座って、俺に髪を梳かれながら口を開いた。

向こう——というのは、ボスウェル卿の誕生日パーティの会場を指しているのだろう。あくまで侍女は日常生活の手伝いが職務のため、さすがに俺は領地外への遠出にまで付いて行かなかった。そういう外出時には、もっぱら専用の付き添いシヤベロン人が同行するものである。

「アジール家のおじ様に、すごく褒められちゃったの。ドレスがよく似合っている、つて」

えへへ、とはにかんで笑む彼女は、本当に嬉しそうだった。わざわざ俺に言うくらいだから、きっと相当なべた褒めをされたのだろう。……あの人も、律儀なものである。

「お楽しみになられたようで、何よりです」

「うん。……ちよつと疲れちゃったけどね」

そう言つて、ふわあと小さなあくびをするフィオナ。まだ少し眠り足りないの
う。今日は予定もないので、あとで昼寝でもしてもらうといいかもしれない。

「——ほかには、どのような方とお話されましたか？」

「うーん。とりあえず、お父さまの知り合いとは挨拶したけど……。それ以外だと、あ
まり同年代の子がいなかったのよね。だから年上の人と、社交辞令ばかり」

退屈さを感じさせる口調だった。子供と大人の中間という微妙な年齢だと、気さくに
会話できる相手を見つけないのかもしれない。なかなか難儀なものである。

フィオナはぼんやりと化粧台の鏡を眺めながら、ふと思ひ出したように言葉をこぼし
た。

「カレンつて……小さい時の出来事、おぼえている？」

「……幼少時の記憶ですか？」

尋ねられた事柄は、俺にとつては少し苦いものでもあった。普通なら印象的なこと
以外はあまり覚えていないのだろうが——

三十路の人間が二十歳のころを思い出すかのように、俺は昔のことをはつきり記憶し
ていた。

脳という物理的なモノが未発達なのに、なぜ記憶を損失せずにいられるのか。そもそも生前の知識と経験が残っていることからしても、俺という存在はきわめて奇妙で不思議で、そして異常だった。

「あまり……いえ、ほとんど覚えていませんね」

だから嘘をついた。それが自然な答えだろう。

フィオナは「わたしも」と同意したが、すぐに「でも——」と言葉を続けた。

「こないだのパーティみたい……両親に連れられて、どこかの園遊会か何かに参加したことが、なぜかずっと記憶に残っているの」

遠い場所を探るように、彼女は目を細めて過去を思い返す。

一部のエピソードだけ鮮明に記憶している、というのはよくある話だろう。祝い事のイベントなどは、非日常的で印象に残りやすいのかもしれない。

「そこで……同じくらいの年齢の、男の子と話したのよね」

「……どこかの、貴族の家の子弟でしょうか」

「たぶんね」

そう曖昧に頷いたフィオナは、ちよつと恥ずかしそうに笑って。

「——その時ね。わたし、その子がものすごく気になったのを覚えているの。なんというか……雰囲気、ほかの子と違っていてね。……一目惚れ、ってやつかしら？」

懐かしむような声色のフィオナ。彼女の口から異性についての話題が出るのはめずらしかった。ましてや、初恋の話となれば。

「——お嬢様の好みのタイプ、だったということでしょうか」

「うーん、そうかも？」

にやけた顔で、彼女は小さく笑った。年頃の少女だけあって、この手の話には相応の興味があるのかもしれない。

俺は彼女の髪を梳きながら、ほんの少しその耳元に顔を近づけた。そして、そっと、ささやくように尋ねる。

「ちなみに、ですが……その男の子の特徴は？」

「んん……知りたい？」

「ええ、気になりますので」

フィオナは頬に手のひらを当て、少し照れたように視線をわずかに下向けた。まるで恋する相手がそばにいるかのような、うぶな所作である。

櫛を持つ手もとめて、じつと答えを待っていると、ようやく彼女も決心したのだろう。秘めた気持ちを告白をするかのように、フィオナは鏡に映る俺を見つめながら、ゆつくりと言葉を紡いだ。

「その男の子ね——めずらしい黒髪だったの。そう……ちょうど、カレンみたいに」



「——だから、あいつは自覚が足らんだ」

非難めいた口調とともに、グラスがとんと音を立ててテーブルに置かれる。

薄い黄金色の液体は、すでに半分の量となっていた。湯で割った蜂蜜酒とはいえ、これが二杯目なことを考えると、彼にとつては結構なペースだろう。あまり酒好きではなかったはずだが、最近はやけに飲みっぷりがよかった。

俺は唾えていた煙草を指に挟み持つと、口内の空気を吐き出した。紫煙はたゆたいながら広がり、虚空に溶け込むかのように薄れてゆく。それを漫然と眺めながら、俺はゆつくりと言葉を紡いだ。

「向こうでの生活は、お忙しいのでしょいかね」

「いいや。ほとんど評判も聴かんから、のんきにやっているんだろう。いいご身分だ」

わずかに赤らんだ父の顔は、いつもの温和な表情から少し離れていた。アルコールが

回り、ふだん抑圧していた感情が表に出ているのだろう。誰かを悪く言うのはめずらしい光景だったが、彼とて人間なのだ。つねに聖人のような振る舞いをすることはできない。

——都のほうで、大学の教師として働いている長兄。ほとんど領地に帰ってこないわりに、何か研究成果を出したり、大した名声を得たりしているわけでもないのに、父にとつてはいささか不満があるらしい。いずれ継ぐ家督のために、領主としての勉強や上流階級との社交に力を入れてほしいというのが、彼の本音なのだろう。

それでも強制はせず、好きにやらせているあたり、父の人の好きさというものがうかがえた。子供に対する心配と期待、そして愛情が言葉からも感じ取れる。親としては理想的な存在であった。

手元の煙草からくゆる煙を見つめながら、俺は言葉を選んで口にする。

「……親の心子知らず、とはよく言ったものです。離れて暮らしていると、どうしても親の抱いている気持ちよりも、目の前の生活に意識が向いてしまうのかもしれないね」それはどちらかというと、父の側に立った言い方だった。まだ長兄は三十路にもなっていない若者なので、個人的にはそつちの気持ちのほうを理解できるのだが、こういう時は目の前にいる人物に共感を示したほうがいいものだろう。

父はどこか寂しそうに頷くと、「まったく、もっと手紙でも寄越せばいいのだが……」と愚痴をこぼした。遠方のわが子を心配する彼の横で、俺の内心では安堵するような感情が湧き上がる。

こういう世俗的な心配や弱音を吐いている父を見ていると——たとえ彼のような優秀な人格者であつても、悩みや苦しみというものがあるのだと。完璧な超人など存在しないのだと。そう……自分と同じように、些細なことに苦悩する存在なのだ、情けないながらも安心してしまふのだ。

「……ああ、すまない。つまらない話ばかり聞かせてしまつて」

「いいえ、気にしませんよ。子供を持つ親というのは、なかなか気苦労は絶えないものでしょう」

「……わが子からそう言われると、不思議な感じだな」

父は苦笑のようなものを浮かべながら、ごまかすようにグラスに口をつけた。けつして親子らしい会話とは言えないが、それを気にする必要もないだろう。もとより彼は、俺が普通の子ではないことを承知しているのだし、いまさら子供を演じるまでもなかった。

「——お前は、手間のかからない子だったな」

ふと過ぎた日を懐かしむように、父はぼつりとそう言った。俺は短くなつた煙草を灰

皿に押し付けると、遠い場所を見遣るように目を細める。父が覚えているのと同じように、俺も小さい時からの記憶をはっきりと保持していた。

——泣きも笑いもしない子供。それを「手間のかからない子」と表現するのか、それとも「不気味で異常な子」と捉えるのか。普通に考えれば後者であろう。

とくに母は、俺の存在にたいそう悩んでいたようだった。自分の腹を痛めて産んだ子が、恐ろしいほど情緒を持っていなかったら、気を病むのも致し方あるまい。

俺がもつと子供らしく、女の子らしく振る舞っていたのなら、あるいは——
「お母様は元氣ですか？」

くだらない後悔を打ち切つて、俺は氣になつていたことを尋ねた。話の脈絡がなかったが、それでも構わない。父は自分から母の話題を出そうとは思わないので、俺から話すほかなかった。

いきなり彼女のことに触れるとは思つてもみなかつたのだろうか。父は困惑したような表情を浮かべ、口を開こうとするが言いよどむことを繰り返す。悩んでいるようだった。

「愛する親について知りたいと思うのは、子供として当然のことです。……教えていただければ幸いです」

そう一押しすると、彼はようやく決心したのだろう。おずおずと、弱々しさを感じさ

せる声色で言葉を紡ぐ。

「いつも医者に治癒を施してもらっているのだが……一向に完治する様子がなくてな。体の不調をずっと繰り返して、もう一年以上も経つ」

「……精神的な要因ではないのですか？」

「わからん。ただ医者によると、体の奥に強い病魔が巣食っているのではないかと。そうならば……よほど腕の立つ魔法の使い手でないと、取り去ることができないとも言っていた」

「……………なるほど」

不調がずっと続いているということは、一時的な症状の病ではないのだろう。俺は医学知識があるわけではないので、話を聞いただけではさすがに有意義なアドバイスもできなかった。たとえ前世の経験があろうと、知りもしないことはわからないのが無情な現実だ。

「お母様に伝えていただけませんか？ お大事にお過ごしください、と。そして——」

俺は酒を少し口に含み、喉を湿らせると、遠い故郷を見遣るように虚空を眺めた。艶やかな黒い髪色の女性を思い浮かべながら、俺は彼女の安息を祈りつつ言った。

「あなたを愛しています。いずれお見舞いにも行かせてください……と」



屋敷の自室に戻った時、俺が目にしたのは慌てて柵に本を戻すリタの姿だった。

その頬には赤みが差しており、かすかに汗ばんでいるようにも見える。よほど焦っていたのだろうか。呼吸も乱れ気味であった。

「お、おお、おかえりっ！ カレン！」

「……はい。ただいま、戻りました」

俺は荷物を置くと、ゆっくりとリタのもとへ近づいた。すると彼女は、びくつと後ずさるような動作をする。何やら隠し事をしているかのような振る舞いだった。

そんな反応を訝しみながら、俺は柵のほうを覗く。ついさつきリタがしまったであろう本。その題名を見て、どんな内容だったかを思い出した。

男女の恋愛を描いた小説——と言ったら聞こえは悪くないが、実態は性愛描写を多分に含んだ官能小説だった。堂々とエロティシズムを謳っていると世間から睨まれるので、最近では外見だけありふれたロマンスの風体をした、中身ただのエロ本、などという偽装本が主流となっているらしい。

この本もリタから頼まれて買ったものなのだが、どうやら本人は普通の小説と勘違いしていたらしい。中を開いてみれば男女の交わりの描写ばかりで、彼女がシヨックを受けて喚いていたのが印象に残っていた。

「こんな下品で破廉恥な内容云々……とか言ってますでしたか？」

「そそそ、そうだっけえ……？」

顔を真っ赤にして、変な笑いを浮かべるリタ。その目線は定まっておらず、羞恥と動揺でめまいを起こすのではないかと、少し心配になつてしまうほどだった。

俺は肩をすくめると、クロゼットのほうへ体を向けた。私物をしまっていると、後ろからおそるおそるといった声が投げかけられる。

「そ、その……カレン……」

「なんですか？」

「……あ、いや……」

とても言いにくそうな口調だった。声からも気まずさを感じ取れる。どうやら俺の心証が不安なようだ。

荷物を整頓しながら、俺は冗談っぽくリタに言ってみせた。

「興味があるなら、今度そういう本を見つけて買ってくださいませようか？」

「きよ、興味なんて……べつに……！」

「恥ずかしがることもないと思うのですが」

なんとなしに、そう伝える。年頃の若者にとつては、その手の関心が湧くのも普通なのだ。深刻に悩むこともないのだと。不安を和らげるようなニュアンスで話す。

「誰だつて、そういうものが気になる時期が来るものですよ」

「……………カレンも?」

「いや、私はさほどではありませんが」

真顔で答えた瞬間、「なにそれえ」とリタは非難するようなジト目を向ける。もつともらしい不服であるが、普通の青少年ではない俺は例外というやつだろう。「個人差というやつですよ」とあっさり受け流すと、彼女は脱力したようにやつだろ。「個人差というやつはしばらく俺の姿を眺めていたが、ふと思いついたかのように口を開く。

「ねえねえ、カレン……………」

「はい」

「——恋人さんは、どうなの?」

「はい?」

なんのことだ? と思ったが——どうやら、以前のことをまだ勘違いしているらしい。父と会っているのを、恋人…………それも同性の相手と逢っているのだと。訂正もしていなかったので、リタの頭の中では今も妄想が繰り広げられているようだ。

まあ、それはそれで面白いので、俺は適当に話を合わせて喋る。

「どうと言われましても。自分のことではなく、相手のことですから」

「えー？ 相手が、その……」

リタは両手の人差し指同士を、胸の前で控えめに突き合わせた。何やらはつきり言うのが恥ずかしいらしい。伝えたいことはなんとなくわかるが。

「こう、なんというか…… “そういうこと” に興味があつたとして」

「はい」

「カレンのほうは……べつにそこまで、って感じなんでしょ？」

「まあ、そうですね」

知識と経験の積み重ねが、本能的欲求を軽減することは否めない。さまざま感覚や情動を理解すると、理性が培われて欲望を抑えることができるようになる。もつとも――

それは性愛を嫌うようになるという意味でもないが。

「もしさあ……。その……相手がカレンを求めてきたら……ど、どうなの？」

その問いは、べつに難しいものではなかった。

もともと、俺は堅苦しい貞操観念など持っていない。女は純潔を守るべきだとか、同性愛は不純だとか、そんな絶対的な道徳など盲信していなかった。

大事なのは――それがひとに不幸をもたらすか、それとも幸福をもたらすかどうかだ。

もしも性行為が幸福に資するのであれば、人生においてプラスになるのであれば、それは歓迎すべきことである。功利主義を基礎とする哲学者たちなら、そう考えるであろう。

……なんて、真面目ぶって考える必要もないだろう。

「その時は——」

愛する人が、肌の触れ合いを望むというのなら。

ただ素直に、その体を重ね合わせて、愛を深めるだけだろう。

「きつと——すべてを受け入れるでしょうね」

——その時が来るのかは、まだ俺にはわからなかった。

007 知者は恋に陥ることなく、また、恋は神与のものではない。(前編)

——まるで馬車馬になった気分だ。

資材や道具を積み込んだ荷車を牽引しながら、アーネストはそんなことを思った。

空は青く澄み渡り、容赦のない陽射しが浴びせられる。晴天下、汗をあごから垂れ流しながら、彼は必死で体を動かしていた。

「——おせえぞ、アーニー」

ようやく目的地までたどり着いたと同時に、アーネストの愛称を呼ぶ粗野な声が響いた。

重いため息のようなものを吐き出しながら、そちらのほうに視線を向けると——四十年代半ばの、筋骨隆々のいかついオヤジが腕組みをして立っていた。

「……す……すみ、ません……」

「まったく、おめーは軟弱すぎるんだよ」

こっちはまだ十五にもなっていない子供なんだよ！ もっと与える仕事も手加減し

てくれよ！

……などと思ったが、アーネストは言葉には出さなかつた。自分は彼のおかげで働かせてもらつて、給金を貰つてゐるのだから。口ごたえしようなものなら、ぶん殴られて故郷の村に送り返されるのが目に見えていた。

——こんなに大変なら、街に出稼ぎに来るんじやなかつた。

心中で、そんな後悔が湧き上がる。

すべての発端は、村で農作業を手伝いつづけることに飽き飽きして、家族にそのことを口上してからだつた。

——そんなにここの暮らしがいやなら、街で働いてみな。

意外なことに、母親はそんな言葉を口にした。

どうやら母方の親戚の一人が、街のほうで大工の棟梁をやつてゐるらしい。そこにお前を紹介してやるから村から出ていきな、とアーネストは言われたのだった。

辺鄙な田舎を抜け出して、洗練された都市で生活ができるなんて——最高じやないか！

……と、アーネストは純粋に思い、じゃあ出て行つてやると啖呵を切つてしまった。

そして——今に至るといふわけである。

「それでよ、アーニー」

「はい……」

「おまえ、もっかい倉庫まで行つて木材と釘を持つてこい」

「ええー!?!」

「文句言うな。おめーができることなんて、単純な肉体労働だけだろうがよ」

ぐつ、とアーネストは反論できず押し黙つた。

ちらりと目を工事現場のほうへ向けると、同じ労働者の男たちが施工作业をしていた。みんな自分よりも年上ばかりで、新人など一人もいない。技術も知識もない子供に、どの仕事を割り当てるかを考えれば——こうなるのは必然であつた。

「ライオネルさん」

「ああん?」

「この建物……あと、どれくらいで完成するんですか?」

「早くて……一か月半だな。公社の社屋だから手は抜けねえんだよ」

そ、そんなに……とアーネストは暗澹たる気持ちになつた。

紹介で仕事に就かせてもらった手前、最低でも仕事に一区切りがつくくらいまでは続けなければならぬだろう。だとするならば、この過酷な肉体労働から一か月半は逃れられないわけである。そう考えると、途端にのどかでつまらない故郷が恋しく思えてしまった。

「おらおら、ぼさつとしてんな。積み荷を降ろしたら、またひとつ走り往復してこい！」
「は…………はい…………」

——街になんて来るんじゃないやなかつた。

肉体労働者の現実を思い知り、アーネストはそんなことを痛感しながら汗水にまみれるのであつた。



「つーかーれーたー！」

下宿先のライオネルの家の四階、つまり屋根裏部屋の隅っこに置かれたベッドに体を横たわらせながら、アーネストは幼い子供のような声を上げた。

そんな彼のすぐ近くで、ダンスを漁っていた青年がどこか同情の色を含んだ目を向ける。

「…………今日も父さんに使い走りにされたのか？」

「そう！ オレを馬か何かだと思ってるよ、あの人！ 雑用ばかりで本当にもう…………」

「ははっ…………。まあ、俺も仕事を始めた当初は雑事ばかりだったけどな」

「…………細工師でもそうなの？」

アーネストは不思議に思つて、彼を見つめて尋ねた。

ライオネルの息子のエリック。彼は大工とは対極のような仕事に就いていた。一日中、工房内に引きこもつて金属を加工する銀細工職人である。なんでも十歳のころに弟子入りをして、すでに十年の経験を積んできたんだとか。

農村出身のアーネストにとっては、細工師は未知の職業である。それゆえに、暇さえあればエリックに話を聞かせてもらつていた。気さくな性格の彼は、アーネストに兄弟のように接してくれる好青年だった。

「最初はほとんど従^{フットマン}僕みたいなもんだつたな。師匠の家も平民にしちやあデカイ屋敷だったから、本当に使用人になつたような気分だった。まともに細工について教えてもらつたのは、一年以上も経つてからだつたな」

「へええ……。でも、使用人つてアレでしょ？ 掃除とか片付けとかしたり……。炎天下で資材運びするよりは楽そうだけど」

「いやあ……。そうでもないさ。家主や先輩方のご機嫌取りをしなきゃいけないくて、意外と疲れるのさ」

「オレだつて、ライオネルさんのご機嫌にいつつもビクビクしてるけどね……。！」

そう言うと、エリックは苦笑をこぼした。新人にとって親方が恐ろしい存在なのは、どこでも変わらないようである。

「——そういえば、エリックさん。何か探し物なの？」

引き出しを開けて書類のようなものを漁っている彼に、なんとなしに尋ねる。

この屋根裏部屋は、もともと一家が倉庫のように扱っている場所だった。棚やチェストがスペースの大半を占め、採光窓の近くに古びたベッドがあるだけ。居候なだけに文句は口にできないが、はつきり言って生活環境は劣悪であった。

アーネストの質問に、エリックは紙束を手に取りながら答える。

「以前に、師匠から頂いた技術書を再確認しようと思つてな」

「ふうん？　なんで？」

「ちよつと新しいことに手を出したいんだ」

「新しいこと？」

「装飾品……指輪とか、ペンダントとか、そういうのも作りたいんだよ。いい加減、銀食器を加工するのは飽き飽きなんでな」

話によるとどうやら、銀細工師というのは食器類の加工がメインの生業らしい。貴族や金持ちは銀食器を使いたがるので、それがいちばん儲かるのだとか。

宝飾品を作るのもなくはないが、そう頻繁に依頼が来るわけではないので、今まであまり手をつけてこなかったのだとエリックは語った。

「アクセサリーかあ。エリックさんは、どんなの作つたりしたいの？」

「……そうだな。俺はまだ未熟だから、複雑なものには手を出すべきじゃない。だから……ペンダントとかが妥当か」

「ペンダント？」

「ああ。できるだけ簡素で、銀の使用量を少なくして、それでもちよつとシャレた感じにして……貴族じゃない庶民でも着飾れるようなものがいいな」

「いいね！ 贈り物とかに良さそうだし」

村でも装飾品というものの自体はあったが、だいたい家庭で手作りするような代物ばかりである。都市の職人が制作する洗練されたアクセサリーというのは、新鮮で惹かれるものがあつた。

たとえば——女の子に贈ったりするのには、打つてつけかもしれない。

……まあ、自分にはプレゼントする恋人なんていないんだけど。アーネストはそんなことを思い、ちよつと虚しくなつてしまった。

「……つと、そろそろ日が沈むな。下にいこうぜ、アーネスト。夕飯の時間だ」

「あ……うん！ オレも腹へつた」

「たらふく食うといいさ。豆だけは大量にあるからな」

「えー……今日も豆のスープ？ 飽きたよ……」

「俺もまったく同感だ」

——そんな言葉を交わしながら、二人で屋根裏部屋から下りていく。

なんだかんだで、アーネストはこの街の、この家での生活に慣れつつあった。

そうして、仕事と寝食の繰り返しを続けていけば、自然と日は経つもので——

一週間の終わりも、当然ながらやってくるのであった。



——安息日なるものを根付かせた賢人は、すべての労働者にとって讃えるべき存在であらう。

窓から差し込む朝の日差しをぼんやりと見つめながら、アーネストはそう心から感じた。

いつもだったらすぐに起き上がり、仕事に出る支度をしなくてはならないが——

幸いなことに今日は週末、すなわち休日である。

週に一度、とくに労働者は一日安息なる時間を過ごすべし。どこぞの偉い書物にはそう書かれているらしく、そしてこの国に住まう人々にはその意識が一般化していた。

「ふわあ……」

あくびを声に出しながら、アーネストはゆっくりと上体を起こす。

——今日はどうやって過ごそうか。

この前みたいに、街をぶらぶらと歩いてもいいかもしれない。のどかな村で生まれ育った自分にとっては、ただ都市を散策しているだけでも楽しいのだ。世界は、未知と発見にあふれていた。

「んー」

しばらくぼうつと過ごしたのち、アーネストはベッドからようやく降りた。

そのまま、階段を伝って下へ行く。

一階にたどり着くと、一枚の紙を眺めながら食事をするライオネルの姿があった。どうやら新聞を読んでいるようだ。

アーネストにはあまり馴染みがないのだが、ある程度の規模の都市部では一枚刷りの新聞が週に数回発行され、住民にも広く読まれていた。意外なことに、ライオネルはこういった読み物をかなり好んでいるようだ。……あんな見た目なのに。

「おい、なに突っ立ってんだ。アーニー」

内心を見透かしたように、こちらを睨んでくるライオネル。あわてて足を動かし、アーネストはテーブルの席についた。

自分が起きてくることを見越してか、すでに卓上にはスープとパンが置かれている。台所で片づけ作業をしている女性——ライオネルの妻に顔を向けて、アーネストは声を

かけた。

「叔母さん、いただきます」

「はいよ。ゆつくり食べなさいね」

気さくな返答をもらったアーネストは、パンを手に取ると——そのままスープの中に入れた。庶民が口にするパンはだいたいカツコチなので、こうしてふやかさないと食べられないのだ。この辺は田舎も都市も変わりがなかった。

黙々と朝食を取っていると、ふいにライオネルが手にしていた新聞を放った。どうやら読みおわったらしい。

「アーニー」

「はい」

「おめえ、どうせ今日は暇だろ？」

「……まあ、そうですね」

街に来たばかりで友達どころか知り合いもほとんどいないので、誰かと何かをする予定といったものは当然なかった。だから暇だと答えるしかない。

ライオネルはニイッと笑うと、身を乗り出してこちらに顔を近づけてきた。

「メシ食つたら、俺と付き合いな。イイトコロに連れてってやるぜ」

「い……いいとろろ？」

「おうよ。お前が行ったことねえ場所だ」

この街には、まだまだ行ったことのないところが山のようにある。

その中でも、ライオネルが連れていきたがるような場所はどこだろうか。——考えても、なかなか思いつかなかつた。

「……どこですか、それ」

訝しげに尋ねるアーネストに対して、ライオネルは楽しそうな顔を浮かべて口にした。

「——酒場だよ、酒場！」



——はたして大人は、どうして酒というものが好きなのだろうか。

祭りだったり祝いの席でアルコール飲料が出されるのは、田舎でも共通である。だからアーネストも酒を口にしたことがあつた。

……あまりのマズさに、こんなモノを飲む人が信じられない、と思つてしまったのだ

が。

最初で最後の飲酒をしたのは、十歳を過ぎたくらいの時だったろうか。新年の祝いの場でちよつと飲んでみたのだが、とにかく苦い感じが嫌だった記憶が残っている。

もしかしたら安酒ピケットだから味が悪かったのかもしれないが、とにかくその時のイメージが強烈すぎて、アーネストは酒にまったく良いイメージを持っていなかった。

「——おう、どうした。遠慮せず飲みな、アーニー！」

「……………」

酒場のテーブル席。

がははと笑って酒を飲むライオネルに対して、アーネストは引き攣った表情で目の前のグラスを見つめていた。

——紫色の液体からは、ぶどうの香りが漂っている。ピケットとは違った、ちゃんとしたワインなのだろう。悪い酒ではないのだと思うが、いまいち美味しそうには思えなかった。

「……………い、いただきます」

とはいえ、奢ってもらった手前、口をつけないわけにもいくまい。

アーネストはおそるおそる、グラスを持ち上げて——液体を少し口内に流し込んだ。ぶどうの味と、そしてアルコール特有の苦味が広がる。

……飲めなくてはなかつた。歳を取つて味覚が変化したからか、あるいはこの酒の質によるものか。いずれにせよ、飲もうと思えば飲むことはできる代物だつた。

——まあ、おいしいとは思わないのだが。

「どうだ？ うまいか？」

「……ぶどうのジュースのほうが絶対においしいと思うんですけど」

「だつはつは！ やつぱ子供だな！ おめえも大人になったら、この味の良さがわかるつてもんよ」

そんな言葉を返すライオネルに懐疑的な視線を送りながら、アーネストはまた少しだけワインをすすつた。苦味のあるそれは、やつぱりおいしくない。

きっと自分は酒飲みになることはないだろうな——

そんなことを、ひそかに胸の内で思つた時だつた。

酒場のドアが開き、新しい客の足音がかすかに響く。

アーネストは、ちらりとそちらのほうを見やり——

そして、びくりと驚いてしまった。

「……………」

凝視すると、その人物の容姿がすぐに目に焼き付く。

——女の子だつた。

自分よりも少し年下の、おそらく十代前半とおぼしき少女。

髪はめずらしい黒色で、肌は透き通るように白く、繊細で可憐な印象を抱かせる。

顔立ちは息を呑むほど整っていて、とても綺麗だった。そして——どことなく物憂げで儂げな表情が、不思議な魅力かまを醸している。

——か、かわいい……。

単純化したアーネストの感想は、つまりはそんなところであった。

ふと思いつくのは、故郷で野道に咲く百合の花の光景だった。ありふれた緑の中に佇む、白く可憐な百合。その差異が印象的で、美しいと子供ながらに感じたことが記憶に残っている。

それと同じだった。

この酒場という空間では、彼女の存在は野道に咲く百合のようで——アーネストの心を揺り動かす美しい花だった。

「——おい」

いきなりライオネルの声が出て、アーネストはびくつとしてしまった。

「な、なんですか……」

「おまえ、故郷に恋人がいたりするののか？」

「は、はい？ いや、いないですけど……」

「ほおー？　じゃあ……」

彼はニヤニヤと笑うと、アーネストの肩をぽんと叩いた。

「——あの女の子に、声かけてみたらどうだ？」

「なんでそうなるんですか!？」

「女をつくるには、そーいう積極性が必要なんだよ。な？」

誰も女をつくりたいなどと言っていないのに、勝手なお節介を焼いてくる。アーネストは呆れ顔をしてしまった。

だいたい、こんな酒場にあんな女の子が飲酒しにくるとは思えない。きっと店の人間の家族が、ちよつとした用事で話を伝えに来た程度なのだろう。

そう、アーネストは予想したのだが——

大いに外れた。

少女はカウンターに座ると、酒を注文したのだ。バーテンダーとのやり取りも、見た感じでは店員と来客のそれではしかなかった。つまり、完全に酒を飲みに来ている様子だった。

「いいじゃねえか、アーニイ。ここいらで女にも慣れておこうぜ？　さあ、青春してきな」

「だから、べつにオレは……」

「なんだあ？　好みじゃないのか、あの子は？」

「い、いや、そんなことはないですけど」

うっかり本音を漏らしてしまった。たしかに、あんな可愛い子と仲良くなれたらなあ、なんて欲がないことはないが……。

中途半端な態度を取るアーネストに、ライオネルは立ち上がって近寄ると――

「ほおれ、行つてこい」

「ちよ、ちよつとつ?!」

肩を押されて、椅子から追い出される。

無理やりなやり方のため息をつきながら、抵抗は無意味だとアーネストは悟った。あのオヤジの様子からすると、自分が女の子に声をかけないかぎり満足しないのだろう。

「……つたく」

諦めを抱きながら、カウンター席のほうを見定める。

――少女は静かに腰を下ろし、本を開いていた。

酒場の喧騒とは、まるで無縁の姿だ。彼女は明らかに異質な存在だった。だが、だからこそ――アーネストは惹きつけられるように感じた。

ゆつくり、自然に歩きながら――彼女の横顔を眺める。

優美な顔立ちは、まるで貴族の令嬢のようだった。彼女がドレスをまとったら、きつ

と誰よりも似合うことだろう。

胸の高鳴りは、ただの声掛けという行為に対する緊張だけではなかったのかもしれない。
い。

「あー……」

近づいて、アーネストは言葉を出そうとした。が、言い出しがうまくいかない。焦つた結果、口からこぼれたのは――

「………こんにちは……？」

「………」

――失敗した！

こんなバカみたいな切り出し方があるだろうか。恥ずかしすぎて、アーネストは逃げ去りたい心境だった。

声をかけられた少女は――わずかに眉をひそめながら、こちらを見上げる。

落ち着きはらった、静かで理知的な瞳だった。

その視線を受けて、アーネストは息を呑む。

どんな反応が返ってくるのか、不安に思っていると――

やがて、少女の瑞々しい唇が、ほんのわずかに歪んだ。

笑みかどうか曖昧な、ニヒルな表情だった。

「……ナンパですか？」

「い、いや、その——」

否定しようとして、言いきれなかった。どう考えても、客観的にナンパというやつであらう。

「……まあ、そうなるのかな」

正直に答えると、少女は目を細めてグラスを手に取る。

琥珀色の液体が、わずかに湯気を立てていた。何かの酒を、お湯で割ったものなのだろう。

それに口をつけ、少女は唇を湿らせる。

一連の動作は、ひどく子供らしさが欠けていて——奇妙な違和感があった。

外見は、アーネストより二歳くらい下に見えるが——

そこにいるのは、女の子ではなくて……成熟した大人のように感じられた。

「残念ながら」

それはどこか、子供に言い聞かせるような声で。

「私は、ナンパに付き合うつもりはありません」

「あ……うん……」

「まあ、多少の雑談であれば——やぶさかではありませんが」

意味がわからず、アーネストは困ったように棒立ちする。そんな姿を見かねたのか、少女は隣席を指し示した。

「どうぞ？」

「え……？ あ……う、うん……」

着席を促されたのだとようやく理解して、アーネストはおそるおそる座った。

どうすればいいのか、困惑していると――

少女は懐から銀貨を取り出し、「少量のミードを、お湯とともに」とバーテンダーに差し出した。

まだ彼女のグラスには酒が残っている。つまり自分が飲むためではなく――アーネストに奢るための注文だと気づいた。

「いい、いや悪いよ。オレ……」

「好きではなかったら、飲まなくとも結構ですよ」

淡々と返され、言葉に詰まってしまう。そんなアーネストをよそに、彼女はとめていた本のページをめくった。その表情はいやに冷静で、隣席のいきなり声をかけた不審者など、どこ吹く風といった様子である。

あまりに平然とした彼女の対応に、断りを切り出すこともできず――

アーネストは居心地の悪さを抱きながら、店員が新しく自分の前に出した酒のグラス

を見つめた。

その色合いは、少女が飲んでいるものと変わらない。彼女が頼む時に、ミードと言っていたのを思い出した。

「——向こうのツレは、親御さんですか」

ふいに少女は、本に目を向けたまま質問を口にした。

「いや、その……親戚、かな。あの人の家に、居候させてもらってるんだ。ちよつと前に、田舎から街に来たばかりで……」

「なるほど」

ページをめくりながら、少女は言葉を続ける。

「出稼ぎで来られたのですか」

「う……うん……。田舎の生活が、つまらなくて……」

「変化に乏しく、新しい刺激が少ないという点においては、あなたの動機には納得する余地がありますね」

持つて回った言い方に、アーネストは理解するまでに少し時間を要してしまった。

少女の話し方は、年頃の子供にしてはかなり奇妙だった。落ち着きがありすぎて、相手がずっと年上であるかのように錯覚させられる。

違和感を覚えながらも、アーネストは酒のグラスを手に取った。「……いただきます」

と謝意を伝えてから、おそるおそる、液体を口にする。

先ほど飲んだワインと比べると——お湯で割ったそれは、はるかに飲みやすかった。アルコールが得意ではない自分にとっては、まあまあ飲めると言える。わずかに蜂蜜の風味があり、口の中にいい印象が残っていた。

「きみは……この街に住んでるの？」

「いいえ。隣の……フレオリック卿のお屋敷に、住み込みで生活しています」

「……メイドさん？」

「はい」

肯定とともに、彼女は酒を口にする。自然にアルコールを飲むしぐさから、相当に慣れてることがうかがえた。

「そっかあ。オレも……妹が、二年前から貴族のお屋敷に奉公しているよ」

——田舎の少女のもつとも有力な仕事先は、一般的に貴族の家の使用人だった。

掃除や洗濯といった雑用ならば、若い女の子でも業務をこなすことができる。大貴族ならば必要な使用人の数も多いため、メイドの募集はそれなりの頻度でおこなわれていた。アーネストの妹も、十一歳からとある貴族の屋敷に勤めつづけている。

同じメイドの話だから気になるのだろうか。視線を本からこちらに動かした少女は、確認するように尋ねた。

「……妹さんは、どちらのお屋敷に？」

「ここらだと有名だから、知っていると思うけど……。アジュール家のところだよ」
「……………なるほど」

彼女は目を細め、どこか遠くを見遣るような雰囲気で言う。

「たいへん立派な大貴族だとお聞きしています。妹さんも不自由なく生活なさっていることでしょう」

「そう……なのかな？ たまに手紙を送ってくるくらいで、どうしているかオレはわからないけど」

年末年始は使用人もある程度のもまとまった休暇が与えられ、村に戻ってきたりするのだが、妹との交流はけつきよくその程度である。手紙も家に送られてくるのは、簡素な文面のものばかりだった。

少し前までは、妹が家族に対して情が浅いのではないかと思っていたが——
ライオネルのもとで出稼ぎ労働をするようになってから、アーネストは考えを改めていた。

新しい環境に放り出されれば、きちんとした手紙をしたためる余裕はなかなかないものだ。そして新生活に慣れれば、今度はそこが自分のホームへと変化してゆく。

離れた故郷のことよりも、目の前の生活にばかり意識が向いてしまうのは、人間に

とって当たり前のことだった。

「——きつと、妹さんもあなたやご家族のことを、心の底では恋しく思っているでしょうね」

彼女は確信したようにそう言うと、グラスの酒を呷るように飲み干した。

——同じような年頃だから、そう信じているのだろうか。

アーネストが不思議そうに見つめていると、ふいに彼女は本を閉じた。

そして——どこか物憂げな表情で、荷物をしまいはじめた。

「失礼。用事を思い出したので——私はこれで」

「え、あ——」

急に気が変わった様子の少女に、反応が追いつかない。

どう声をかけたら良いのか困っているうちに——彼女は椅子から降り、店の出入り口

へと体を向けてしまった。

いきなりの別れに、アーネストは思わず——

「ま………待ってよー」

そう、呼びとめてしまった。

足をとめた少女は——ゆっくりとこちらを振り向く。

艶のある黒髪がかすかに揺れ、翳かげのある瞳がこちらを直視した。

「そ、その……」

端正な美少女の貌かおに見つめられ、緊張したアーネストはうまく声を出せない。

それでも、なんとか、勇気を振り絞り――

「えつと……オレ、アーネストっていうんだ」

「……………」

「きみの名前は？」

「……………」

少女の表情が、かすかに和らいだ気がした。

思慮するかのようにならずに眉を寄せたのち、彼女は口を動かさし――

「――カレンです」

そう、名乗った。

カレン。

その名の少女は、唇の形を少しだけ変えていた。

それは微笑のようにも、苦笑のようにも、冷笑のようにも見える、どこか不器用で、不慣れで、そして魅力のある笑みだった。

その表情に見惚れているうちに――

彼女はふたたび背中を向け、静かに酒場から去ってゆく。

瞳に焼き付いた、カレンの顔を想起しながら。

——また、彼女に会えたら。

そうアーネストは強く思うのだった。